家庭雜誌

第五十七號

青年叢書

號外 **本朝美術**

新刊發賣

挿畫 故元信筆 陶淵明像　定價十二錢 郵税二錢

富國策は近時の警語也。何處に日本將來の富源を一定すべき乎、苟も世界的比較に據り、日本人種獨得の長技を擧けなば、工藝美術は其主なるものに非ず乎。工藝國として製作人種として奮起するは國務の急なるものなり、而して其振起策如何工藝美術敎育は一法也、完美なる工藝は國民と專門家の兩者より生る、故に『本朝美術』は日本の純正、應美術の起原、種別、盛衰、感化を技術評論の嚆矢として總合的歷史的に論下すると同時に、國民美術思想の普及法、專門家今後の態度、將來の純正、應用美術の方針を暗示す。

一國の工藝は國民の富と智力の反射也、故に本朝美術は一種の文明史たるなり。而して絕東に在りて異常の精華を彰はせし、本朝美術の現況果して如何。商工家、國家敎育家は勿論、渾ての國人一讀を惜まざれ。

青年叢書第一卷 **武備敎育**　定價十二錢 郵税二錢

青年叢書第二卷 **遠征**　定價十二錢 郵税二錢

順次出版の『青年叢書』目次は左の如し

第三卷 市民
第四卷 職業
第五卷 學校
第六卷 技術
第七卷 傳記
第八卷 時世
第九卷 實踐道德
第十卷 壯遊

發兌元 **民友社**　東京京橋區日吉町

六版

德富猪一郎著

吉田松陰

第六版出來候

本書は殉國烈士の活摸範、信仰あり大節あり活動ある志士の面目を知るとして時節柄國民必讀の書と申すべし
又た避暑讀書用としては十二分の價値あるべし

肖像繪畫挿入
紙數三百四十頁
定價五拾錢
郵稅八錢

再版 國民叢書第七冊

德富猪一郎著

第二 靜思餘錄

定價十錢
郵稅二錢

水料を轉ずる勢力は寂寞幽靜の源泉より來る人生の大業焉ぞ微眇の奥底に潜まりたる心靈が靜思練想せられたるの餘、發越飛躍して此に到りたるものならざるを得んや。今や戰爭の影響は社會を鼓吹して事々物々奮迅飛動せんとす、是時に於て誰か社會に向て靜思の材料を供するものぞ。若し餘錄にして其萬一を値するに足らば則ち幸甚也。

五版 國民叢書 人物管見 定價拾五錢 郵稅二錢

六版 國民叢書 青年と教育 定價拾五錢 郵稅二錢

十一版 國民叢書 靜思餘錄 定價拾五錢 郵稅二錢

六版 國民叢書 文學斷片 定價拾五錢 郵稅四錢

四版 國民叢書 天然と人 定價二十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

本社電話番號七十番
發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年七月十日發行

家庭雜誌第五拾七號

目録



家庭雜誌第五拾七號

（明治廿八年七月十日發兌）

社說

新日本の道德

塚越芳太郎

は道德の基礎なき世より危險なるはなく、人は道德に關する一定の信仰なき人より自恣なるはなし。舟にして楫なくんば竟ひに安くにか行らんや。

我が維新の改革は泰西文明の輸入に由て、日本思想の根底を動かしたりき。隨つて舊日本の道德漸く其制裁力を減じたると共に、新日本の道德未だ其地盤を固定せず。是に於て乎道德敎育の基礎は今猶日本敎育界の問題たり。

然れども是れ決して此くの如く解し難き問題にはあらざる也。畧言すれば渾ての開化が舊日本開化の粹と泰西開化の粹とを調和し、以て新に日本の開化を作れると同時に、舊日本の道德と泰西道德の粹とを萃め、以て之が新基礎を定むべきもの則ち新日本の道德にあらずや。

舊日本道德の粹とは何ぞ、武士的道德是也。泰西道德の粹とは何ぞ、市民的道德是也。

武士的道德は社會を中心とするもの也。市民的道德は個人を中心とするもの也。武士的道德は社會國家を持續する所以。內にしては則はち義心となり、義氣となり、任侠となり、武士道となり、發して愛國愛人種愛人類となる。市民的道德は個人を持立する所以。內にしては則ち自尊となり、自重となり、勸勉となり、大膽

不敵となり、發して殖産興業富國强兵の源となる。而して所謂二者の調和なる者は、武士的道德の精神を以て、市民的道德を行ふことと是のみ。

此くの如くして始めて個人立ちて國家立ち、內に向ては富み、外に向ては强く、以て人の人たる天職を全ふすべく、以て國の國たる天職を盡くすを得べし。故に吾人は新日本の道德が必ず其基礎を此の二者の上に置かざるべからざることを堅く信じて疑はざらんと欲する也。

加之其所謂市民的道德なるもの丶如きも、一方には稱して之を泰西的道德と謂ふと雖、其實亦現在日本の道德にして、遠く之を外に求むるに及ばざるをや。手近く言へば、日本の二大都府の理想は明に此の二道德の標的を以て立ちつ丶あるを見る也。即ち言換れば新日本道德の基礎は、東京道德と大坂道德との調和の上に在りと謂ふに外ならず。

東京道德即ち江戸道德が、其久しく武士の都なりしが故に武士的道德なることは言ふまでもなし。然れども大坂が久しく市民の都として、武士の都たる江戸に頡頏し、以て此の市民の都を維持したるが爲に其最も發達したる市民的道德を有したりしことは、世人の未だ甚しく注意せざる所たり。世の道德を說くものは唯り日本の貴族的道德たる江戸道德を稱するのみにして、日本の平民的道德たる大坂道德を度外視したるは比々然るにあらずや。吾人は大坂道德か已に立派なる市民道德として、多く泰西道德に恥る所なきを見る。

殊に大坂道德の最も著しき一例は、金錢授受に關する信用是也。市民相互に對する躰面是也。巢林子の社會戲曲を讀みたるものは知るべし、大坂都府の理想が如何に金錢を重視したりし乎、又其如何に市民を重視したりし乎を。彼は幾多の『町內に面目なし』若くは『大坂中へ言譯して見せふ』とて身を殺したるものを

歌ひしにあらずや。又彼は幾多の金錢授受の契約を懲ることを恐れて身を殺したるものを歌ひしにあらずや。今の大坂は猶古の大坂の如き也、余は今春西に遊んで其第一に感起したるものは、實に此の大坂道德にあらずんばあらざりき。

大坂道德は則ち別言すれば英國的也。東京道德は則ち別言すれば佛國的也。相調和して以て天下に敵なかるべきにあらずや。若夫或は單に江戶道德のみを發達せしめん乎、國家は破產に近き伊太利の如くならざるを得ざるべし。若し夫れ或は單に大坂道德のみを發達せしめん乎、其全く個人在て國家なき支那人民の如くならざるもの幾何ぞ。要するに尙ぶ所は二者の調和に在るのみ。

史談

百年前の海戰（下）

敵味方の船は、今や離る可からざる程に結びつきたり。敵味方の兵は、今や顏見合ひ言ひ合ふ程の距離にあつて血戰す。砲聲銃聲烟の中に渦まき起り、火光は雲を焮り海を紅に染めたり。

此時米艦ボン、ホム、リチアド號の有樣は、實に危き有樣なりき。敵の十八封度彈は船の水平線下を貫き、船いたく漏り初めぬ。我賴み切りたる十二封度砲數門は已に發射を止め、六門の古き十八封度砲の其二門は最初第一發を放ちし時破裂して砲手を斃し、餘は用をなさず。今は用に立つもの、唯半甲板の九封度砲二門あるのみ。其も士官重傷を負ひて指揮するものなければ、ペウルジヨーンス自から甲板に立つて指揮したり。幸

にして此に砲臺の未だ默せざるが上に、檣梔上の砲臺は、バウルジョーンス平生自から教導し置きたる甲斐ありて、砲彈着々的中し、敵艦檣頭の砲臺今や一人を剩さゞるに到れり。時已に午後八時を過ぎ、海上全く暮れ渡り、十五夜の月空にあり、火と烟に包まれたる敵味方の船は、噴火山の海中より湧き出でたる如く、轟く砲聲雲に響きて凄じきこと限りなし。時に大風の吹き止みたる時の如き恐ろしき遙かの沈默は、兩艦の間に起りぬ。忽ち英艦セラピス號より叫ぶ聲あり『降參か』と。バウルジョーンス大音に答へぬ『未だ軍にかゝらぬ所だ』と。

此時英艦よりは突進して米艦の甲板に乘り入らんとしたるに、米將ジョーンスが長き鎗を提げて艸門に立ち塞りたる勢に辟易し、後に數多の伏兵あらんことを恐れて、終に果さゞりき。斯りし程に、檣に立つたる勇敢なる米國水兵は、一桶の水提げて今は砲手もなく火炎々と燃へ居たる敵の本檣に乘り移り、火を打消しつ、敵の檣上の砲を以て敵の檣上より散々に敵の甲板を狙擊し初めたり。然るに勇將の下また弱卒ありて、米艦の三人は我船の次第に沈まんとする樣子に心怯れしか、主將には知らせもせで、降參の白旗を揭げんとせしに、幸なる哉敵の砲丸は旗竿を射折りたれば、聲をあげて敵艦に降參と呼はれり。バウル、ジョーンス聞くより大に怒り、提げたるピストルの臺尻もて其男を敲き倒し、猶も太聲に令を下して、いよ／＼敵を砲擊銃擊す。敵艦も此激烈なる攻擊に遂に抗し兼ねて錨を斷ちて逃げ去らんず景色なりしも、兩艦緊しく相結びたるべしとて、今は是非なく最後まで戰しむるを得ず。

戰の初より同盟の諸艦は、唯バルウス號一隻命を奉じて敵の副艦カウンテス、オフ、スカルボロウ號を捕獲したる外、絶へて近邊に寄りつかざりしが、此時午後九時半の頃に到り、狂艦長の指揮せる沸艦アルライア

ンス號あらはれ來り、敵艦を砲撃するよと思ひの外、轟然一發味方の米艦へ打込みたり。ハウルジョーンス大きに驚き、急に信號燈をかゝげ、滿艦の人聲をあげて。味方の船ぞ〳〵』と叫びたるも、佛艦は更に船をめぐらして一發の下に味方の士官を傷け十一人の水兵を斃し、其砲丸は米艦の水平線下を幾箇となく貫ぬきて、水は渦まく如く船に浸入し來り、今はポンプの力も及ばずなれり。兵は多く死して生きたる者も皆疲れぬ、砲は大率默し、下には潮水の船を浸すあり、上には火の船を燒くあり、今は勇敢なる米艦の士官等も主將に降伏を勸むる者ありしも、パウルジョーンス一向に受つけず。我艦近きに沈む可しと云へるに、ジョーンスは打笑つて『心配せられな、追付にき船を取つて乘り移す可し』と答へつゝ、猶も勇を鼓して敵を攻撃せり。此時米艦の船室には、英國沿岸襲掠の際捕にしたる倔强の英人一百人を閉ぢ籠めありしが、何人が放ちけむ、一百人ドカ〳〵甲板に出で來れり。まことに是れ危急存亡の機一髮若し一百の英人敵船に乘り移つるか、兵器を取つて立たば、米艦の運命も夫れ迄なり。然るに豪膽不敵のパウロジョーンスは一百の英人が驚恐して殆んど心こゝにあらざるの氣色を見澄まし、盡く之をポンプの下に集め、力を合せて浸入する水を汲み乾させたり。現に味方の船は飛び乘る程の距離にありながら、我牢獄たる米船―火燃へ水漏り半沈みかけたる米船の喞筒にかゝりて一生懸命の力を盡す英人の狼狽は左る事ながら、之を利用してポンプを使ひし米將の膽には毛や生ひ居たりけむ。

此時一人の勇壯なる米國水兵、手擲榴彈を滿盛せる桶を提げて、敵艦の本艙にさしかゝりたる我船の本檣の橫桁にスル〳〵と走せ上り、冷々然桶を桁にくゝりつけ、敵の艙門を見かけて彈丸を投げ始めぬ。恰も好し、第一に擲ちたる彈丸は敵の艙内に滾下して、積みあり

たる敵の彈藥箱に當りて破裂し、爆然一聲敵艦の內部は火と血と碎けし骨肉に漲りぬ。此機を攫んで、バウルジョーンスは勢劇しく攻擊し、流石勇戰せる敵艦も終に白旗を揭げ、敵の艦長バーアソンは彼船より此船に跨り來りて、吾劍を米將の手中に置きぬ。米將は敵ながらも英將の勇を愛でゝ、直ちに劍を返へしぬ。此戰午後七時に始まり、十時半に到りて終りぬ。英艦の死者一百名、傷者約一百名。米艦も亦四十二人死して四十人傷きぬ。而して此時米艦の有樣は、柁斷へ、船內の潮水深さ五呎に及び、檣傾き折れたるあり、甲板の燒けたるあり、死と火と躍り狂ひたる艦內の有樣、言語に絕する程なりき。船迚も救ふ可き望なかりければ、バウルジョーンスは乘組を帥ひて捕獲せる英艦に乘り移りぬ。明朝十時、勇敢なる米將が不朽ならしめたる老朽船ボン、ホール、リチヤアルド號は、米國旗を揭げつゝ波底に沒せり。（完）

文藝

桑つむ少女

無名氏

うしろの畑に朝なさな　床しき鄙歌うたひつゝ
桑つむ少女なつかしみ　名を問たれば耻しげに
顏あからめて打笑みて　摘ためし籠を持つゝも
柳ひともとえだ垂るゝ　門口の內にかくれけり
都にいでゝはや三とせ　年ふるさとに歸りきて
やなぎ一もと枝たるゝ　門を過つゝ見入るれば
ゑめる面わは變らねど　元の少女にあらずして
清き眉をもそりはてゝ　家の妻とぞなりにける
また一とせの春あきを　旅におくりて歸りきつ

柳ひともとえだ垂るゝ　門を過つゝ見入るれど
面わも見えず聲もなし　家の妻にはあらずして
つばめとびかふ古寺の　墓のあるじと成にけり

折にふれたる

老人と家庭

讃美生

老人を有する家庭は幸なり。

老人は老人なり、獨り齢に於て老いたるのみならず、人生に於て老ひたるものなり。家庭に大事ある時に出で來るものは老人なり。老人は家庭の守護神なり。老人なき家庭は守護神なき家庭の如し。

老人は人生の解釋者なり。其の鬚眉銀の如くして、犯すべからざる威容を見る時は、人生の如何に崇高森嚴なるやを想はしめ、其の滿面皺波の裡、融々たるが如き滿足の色ある時は、人生の如何に圓滿和樂なるやを想はしめ、其の青年を周圍に集めて、自個の舊時を語る時には、聽くものをして人生の如何に趣味多きかを想はしめ、經驗なき家族の容易に希望して容易に失望する時、渠等が警告する所を聞けば、天地の如何に悠々にして、人生の意味の如何に深長にして且つ幽玄なるかを學ばしむ。故に曰く老人を有する家庭は幸なりと。

家庭に老人を有するの幸、猶ほ是に止まらず。青年は自由を愛し、老年は秩序を愛す。自由の裡には、進歩あり、快樂あり、閑適あり、平和あるも、自由を好むの弊は往々流れて、亂雜、放逸、粗莽、怠慢に陷るを免れず、好く是等の惡習を排し、剛健なる生氣を家庭に滿し、外部より刺激して家族の品性を完成せしむるものは、老人の力なり、老人なき家庭は、此の刺激劑を缺くものなり。

青年の談話に於ける、蠶兒の如く、自から出すよりも

寧ろ蝕する方なり。老人の談話に於ける、繭の系を出だすが如し、老人に對して談ずれば、いつまでも話頭盡きず、愈久うして愈興味深きを覺ゆ。若し快樂の時老人缺かば、其の妙興の索然として盡くることを免れず。

老人は活ける辭書なり、家庭の人事に於て、少しく明亮を缺く時、家に老人あれば、面倒なる書物いぢりを避くるを得。偶然の客來、若くは不時の疾病に醫師の手間取る際の如き、老人は甚だ重寶なり、事慣れざる若輩が徒らに當惑して目をまはせる間に、經驗に富める、渠等は、能く如何に爲すべきかを敎ふ。

老人は甚だ淸潔を好む、若年は之を好まざるに非ざるも、多事にして、意到るも腕到らざるを免れず。老人家にあれば、凡ての手落を補ひ、庭草を取扱き、往來を掃き、玄關を淸め、亂雜なる、併しながら他の干涉を避くる書齋すらも、いつの間にか整頓せられて、大に困窮する事なきにしもあらず。老人の潔癖ほど、可憐にして然も辱けなきものなし。

家庭に於ける老人の德、固より此に止まらず、余は唯其二三を擧ぐる而已。

家庭になくてならぬものは金錢なれど、今の家庭は金錢よりも寧ろ老人を缺くもの多かるべしと思ふ。

婦人と學問

妙齡なる婦人に一個のヴァニチーあり。過度に「學問」を愛好すると是なり。その所謂ゆる學問とは、敎育を意味するにあらず、唯々「學問」と云ふとなり。彼等は凡ての希望、凡ての理想、擧げて學問の中にありとし、人生の生活も、世にあるの幸福も、盡く學問の中に包藏せりと爲し。同姓の中學者ありと云へば非常に羨望し、誓つて其人に偎らんとを欲し、異姓の中に學者ありと聞けば、非常に愛慕し、其人の人となりをも研めずして、直ちに其人と同栖するの幸福を思ふ。殆い

哉。余は是流の三人の婦人を識る。其一は「學問」「學問」の間に嫁し後れ、遙かに嫁せんとして良媒なく空しく三十歳を踰えんとするもの。其二は惜しき身を學問の犠牲となし、遂に學問の爲に斃れしもの、其三は非常なる學者と信じて、輕々しく人に嫁して過ちたるもの、皆臍を噛むも及ぶとなきなり。

婦人は教育なかるべからず、然れども過度に學問を愛好せば誤らざるもの鮮なからん。

若き夫婦の一大時期

凡そ人子を擧げば、身のふりを直さゞる可らず。そは云ふまでもなく、子は親に從へばなり。父若し品性乏しと思へば、自から品性を作らざるべからず、母もし教育足らずと思はゞ、自から教育を足さゞるべからず、酒のむ父は、酒を廢せざるべからず、然らざれば子の酒間に侍坐さるを禁するを得じ。喫烟する母も、喫烟を止めざるべからず、然らずんば子の煙管を弄ぶを禁ずると能はじ。

余は或人を識る、渠は極めて意志弱き人なり。渠久しく喫煙を廢せんと欲するも能はず、人に説かる、廢する能はず、人と約する、廢する能はず、偶々子を擧げ、子を烟に噎ばしめしに由つて決然として廢しぬ。是事小と雖、以て大に及ぼすべし。

親たるの初め、是れ人に於て一大時期なり。人の一新すべきの時なり。世の爲に新なると能はず、己れの爲に新なると能はざる、是れ倘ほ酌量すべし。最愛の子の爲にすらも新まると能はずと云はゞ、其人眞に憫むに堪へたり、渠は果して何の時に新まらんとするや。

幽閉と婦人

婦人は地上の天使なり、婦人は信仰の宮、道德の保存者なり。其の衣服の洗濯者たるが如く、亦社會の洗濯者たり。婦人の天質斯の如く美にして且つ高しと雖、然も之を社會の奥に密閉して毫も戸外の空氣に觸れし

めさる時は、彼等を如何なる腐敗に誘い下すや、是れ世の婦人論者の最も注意すべき所となす。

近時千代田城の大奧の秘事として往々新聞に散見するものを見るに、奧女中をして裸躰相撲、裸躰踊を演せしめて將軍の夫人親ら觀る等の事あり。

獨り幕府の大奧のみ然るにあらず、三百諸侯の陪臣の家庭の內、亦斯に類せるものありしときく。記者の朋友にして、某藩國老なりし人の子あり、渠嘗て其の僅に二十年前の家庭の出來事を語つて曰く、歲の大晦、舊臣等の妻女、相伴ひて歲暮に來り賀する時、國老の妻なる婦人は、彼等を饗應したる後、彼等の視感を娛ましむるに、一塲の餘興を以てす、餘興とは何ぞや。曰く、其多數の小間使の女子を聚め、賭くるに縮緬、若くは女子等の平生最も希望する織物を以てし、明燈の下を裸躰匍匐して之を取らしめ、賓客をして其前に列び居て之を見せしむ、是なり、大概年以て例とせりきと。

斯かる例の當時之を秘し、今日にして散見するもの、一にして足らざるが如し。今日に於ても猶ほ此の醜態を存する家庭あるやも、未だ知るべからず。是皆幽閉を以て婦人を腐敗せしめたる「時世の罪」なり。

婦人と讃美歌

好題目、恨らくは未だ嘗て之を歌ふものなきを。

婦人にして聖書を說く、美ならずと云ふにあらず、然れどもその讃美歌を歌ふの更に美、否最も美なるには如かず。

婦人と讃美歌、是れ如何なる宿緣ぞ、余は敎會に臨む婦人にして、よし聖書をば忘るゝとも、曾て讃美歌を携帶するを忘るゝものなきを見る。嗟呼婦人をして、地上の天使たらしむるものは讃美歌にあらずや。

牧師の力ある說敎の終りまで人の心に印せらるゝが如く、婦人の力ある讃美も亦終りまで人の耳に彫りつけ

らる。
讃美歌は教會に於よりも一層家庭に於て必要なり。琴聲高樓より聞ゆる時、余は毎々歎息して其の憂を知らざるを羨む。然れども讃美歌臺所より聞ゆる時は、覺えず涙下る。是の如き家庭は如何ばかり幸福なるものぞと。
余は一少女を識る、彼は病むで病院に臥し病を忘れて神を讃美し、傍らにあつて、説教師を笑殺したる一人傑を感慟せしめぬ。かゝる事實は珍らしき事にあらず。「婦人と讃美歌」、此好題目を究めて、隠れざる婦人の美質を世上に紹介するの君子なきか。

樂しき旅（其二）

藤島ゆき子

今日は五月五日とて、晝け夕けの設けとり〴〵に限なし。客人二人來て共に語らふ。大坂の人といへど、衣の好み京都の風にて、女子の十ばかりなるが、おとなぶりていふさま、從弟の事など思ひ出られて、いとをかし。父君より御書來りぬ。明日某といふ家に移るべしとあれば、しばしの間此邊を見むと、此年三才なる此家の愛兒と、はしためと打つれて、立出て、大本營の何なる御所の御門を拜がみ、さて時代古物展覽會にと行く。時代を分ちてとり〴〵に珍らしきもの、美くしき物數々あり。車、かぶと、五重衣、また掛物、手道具、刀置物、佛像卷物など、覺えがたし。家に歸りて庭に下りたち遊ぶ。立てたる鯉のぼり五色の吹ながしなど、いと美くし。京都にては、大方はふきながしを立てず。鯉もまれなりときく。をさな子いと愛らしく、此年三つなれど物よく聞わけて、我傍をはなれずゐて、樣々の物がたりなどす。坊はお馬が一番すきとて、玩物の大きなる黑馬持來て、こは坊のなり。これにて手綱つくりてよと、短き紐もて來るなど、いとか

わゆし。又小さき國旗を肩にかづきつゝ、萬歳〳〵と叫ぶも、まだ舌よくまはらぬが中々にをかし。夕つ方客人訪く、そは千葉にて名のみは聞ゐし人なり。何くれと語る。母君は車にて、父君の御ともに物し給ぬ。むしろ終へて後、東京に出すべき書、日記などかきつく。

六日つとめては雨ふる。晝つ方より晴ぬ。父君の御もとより來しむかへの車に乘りて、某樓に行く。家は鴨川のほとりにありて、四方の見わたしいとよし。殊に離れ屋を借りきりたれば、いと靜なる何よりも嬉し。一時頃より、父母君と博覧會にゆく。美術品には、めでたしと思ふが多く、織物には望ましき品少なからず。あれもほし、これも買たしと父君にいへば、ふくつけき事よと笑ひゐましぬ。機械には珍らしきものどもあり。されど、東京のに比ぶればなど母君と語らふ。美術館の内に、知れる人の畫あり、いとなつかし。茶店にて志ばし休ふ。噴水のあるかたへとて、志ぶきのかゝる、身にしむ心地す。歸さ智恩院に詣ず。境内いと廣く、山門本堂共に、いと高くかつ大いなるに、先打驚かれぬ。生しげれる木立も、老木のみなるに、いとどいかめしくおぼゆ。數多き石段を下りて圓山を見、祇園町四條通を過ぎ、四條の橋を渡りて家に歸りぬ。夕けして後、また本能寺のあなる寺町通、新京極より祇園を通り、三條の橋を越してかへりぬ。夜月のかげの水に映れる樣、いひしらず。あはれ此景色を都の友になど思ひつゝふしぬ。

七日てけよし。九時頃より父母君と共に車にて、北野天神に詣づ。いと〳〵壯大なる御社なり。平野神社を前よりをろがみて、金閣寺にゆく。長き廊をつくりて、上より庭をながめしめぬ。池の廣き事、珍らしき石の數〻なる事、何にかあらん蟬に似たる虫の鳴く聲、いひしらず嬉し。階子を上りていよ〳〵上に出れば、有

名なる金閣なり。金箔大方ははげて、所々殘れるも、たとへむ方なし。一つ下に降れば、義滿公の像など飾りありて、傍に公の手水せしところあり。名を漱清と記しあり。夜鳴石は正面の水の中に見え、そがかたへに、黒く赤く魚の集り浮びをり。又降りてそこを出で、庭を過て南天床萩棚有名なる茶室を見て出ぬ。さて妙心寺にゆく。寳物いと多かり。探幽の畫の内龍虎の屏風殊に目とまりぬ。堂幾つかあり、盡く開きて見ぬ。天井は龍の極彩色にして、恰も生けるが如し。高さ如何計りあらむか。今日は扇ほしき程なるに、内に入れば寒さとみに身にしみぬ。庭に雪江の松あり。第六世雪江和尚の栽ゑられしにて、四百餘年の星霜を經たりとか。緑の色永久にして、いと美はし。こゝを出て御室仁和寺に詣づ。古き書どもに見し處とて、なつかしき心地す。代々の帝の宸筆、三十六歌仙の額などを見る。石段を上り葉櫻を左右に見て、清涼寺にものし、こゝにても、何くれと見て、嵐山に至る。岸の家にいこひて晝けす。おしなべて緑なる松の木間に、葉櫻の立まじりたるが、景色たとへん方なきに、下を流るゝ水の色いと清くして、こゝにかしこに筏をくだし、舟浮ぶるも、わが爲にとてはあらぬものから、景色そふる心地せられ、かじかのなく聲もたゞならず。父君御歌よみませり。

　　蛙なくあらしの山の深緑
　　　　　春のけしきにおとらざりけり

いましも詠めとの給ふ。かくめでたきをうけたまはり侍りては、いかでかといなめど、きゝいれまさず。せんかたなくて、昨日大本營の御門をろがみし折に、たく心に感ぜし事どもを思ひ出でつゝ書きつゞけつ。

　　流れゆく水すぎし世に
　　　　三つの船をも浮べけむ
　　たかねのさくら宮人の

春のかざしと成にけむ
平安の京都しきまして
はや千年をも過ぬれど
川の御神も山神も
かゝる春にはあはじかし
皇國の光りさしそひて
大御いくさをすべますと
古き宮居にましませる
かゝる春には逢はざらむ
あはれかしこき大君の
千代萬代のみさかえを
山まつかぜも川なみも
ひとつ心にうたふらし

紙のはしにかきて見せまつれば、こは長きものをつくり出でしよ。さばれわが短きにはおとりたらむとの給ふ、いとはづかし。家の妻出で來て、何くれともてなしがほに語る。舟にめして山のあなたなる温泉にものし給はずやなどいふ。されど母君の船は好ましからずとの給ふまに〳〵、ゆかぬ事になりつ。大洋をも渡りし身の、かゝる川舟をと父君ののたふもいとをかし。又父君、今すこしすぎなば、時鳥のなくべきものをと語り給ふ。心のうちに、

花は皆散りはてにけり時鳥
しのひ音をだにきくよしもがな

われながらふつゝかなるがやさしくて、父君にもきこえまつらず。いと久しく休らひゐて、そこを立いで、渡月橋を渡りて、向ひの岸に至る。田畑の中道をゆくに、麥生の青やかなる、いと心地よし。吹わたる風も、暑からずはた寒からず、かくよき時候に、かねて見まほしと思ひゐしこゝかしこの名所を、父母の君と共に見めぐる我身の嬉しさは、あはれ何にかたとへてまし。たゞ心に感謝して過行く。二つ三つ先にたちてしるべ

かほなる蝴蝶に誘はれて、松高き所に出づ。こゝに松尾神社あり。詣つる人稀れにしていと静なり。世に酒造の御神とたゝへて、酒造る人は必ず詣つとぞ。拜殿のかたへに相生の松あり。根一つにて上は二つなり。高さも一つにて、いと珍らし。こゝより梅宮にゆき、をろがみをへて、六角堂に詣つ。こゝは最も賑はしき六角通にありて、堂の形六角なり。一まはりして直にかへる。町の賑はしき事限なし。田舍人の大方は歸りつときけど、未だ毛套の青き赤きなどひまなく目にうつり、京都の人よりは他國の人の方多く見うけぬ。家にかへり、樂しく夕けしてより、父君は知れる人がり音づれむと、車にて出行ましぬ。母君と二人、川水にうつろふ月影をながめて、都のほども語り出でつゝ、高田の祖父君、本郷の伯父君の御もとに書かく。また母君のかはりに、家人のもとへ、留守の内の事ども何くれと記して、はしために出さするほど、父君歸り來ましぬ。

家底の消滅

筑峰女史

信濃なる淺間の山のかたほとりわびしく住める工夫あり夫婦が中に二人りの女子ありてたらざる中にも其の日をばむつみ勵みて樂しみは夕顔棚の下すゞみと無事に送るぞ有難き夫は工事に朝とく家を出で日暮に歸るが常なりきある日の事最早歸りもほどなからんと妻は外面に氣をつけつゝ夕飯の仕度も出來しかば今か〳〵とまてどもいかなる用事のありつるかはや日も西に入りはてゝ月さへ高く山の端にかゝれば妻はます〳〵不審さに心ときめき立つ居つ。コハ。たゞ事にはあらずめり隣り村なる同業友達の家に行きてきかば委細はわかるらんと十三歳になるやならずの小娘に乳吞子あづけ心ならずも留守をさせ隣りといへど野らこへ田越へ

山里の不便さに心いそ〳〵ながき山路をたどり行く中に來かゝる人聲もしやとたゞずむこなたをば見るより人々は顔見合せ、いつこにいますやととひかけられて心つき見れば夫の友の某にてありければ。アナ。云々にてあなたの元まで今行く道にてありつるが夫はいかゞしてかく遲きやとせわしきとひに人々は驚きながらさあらぬ躰にもてなしつゝまづ兎も角も少し用事もありつれば共におん身の家まで行くべしといそぎいそがれ歸り來る。足音きゝて小娘は虫がしらすかいそ〳〵と父の歸りを喜びつゝ見るに隣りの人々等と母のみなれば。ナゼ。わがとゝさまのみは歸らずと涙うかめてとふ子より妻が心の中をば、おしはかり何と岩間の苔け衣ぬるゝ袂をおしかくしいはんとすれど晴れやらぬ道すがら友のそぶりに心づきさては夫は工事のためけがばしなしつるかつゝまで有し事どもをつばらに噺し聞かしてよといはれて人々たまりかね先だつ涙おしぬぐひ知らるゝ通り先頃よりかゝり居りし彼の。トンネル。の修繕に從事中この頃續く霖雨にどこにか響の出來しにや工事中俄かに大雷の落ちたる如き音しければ一同驚ろきふりかへり見るにこはそもいかにせん、此方の主人の受持場あと形もなく落ちくづれのがるゝすべもなかりしにやそがまゝ土中に生き埋め、あへなき最後をとげられたり、此の上はぜひもなしかゝるは宿世の因縁とあきらめられてねむごろに回向のほどばし賴むぞかしと一ぶ始終を聞よりも妻は涙にむせかへり虫のしらせかことと更によべより心地あしかりと云はるゝ故にとむれどもきかずしていで行かれしも不足がちなる身の悲しさ、此の後ちはいかにせんと嘆きの中漸く夫の死骸をば戸板にのせてかつぎ込めば親子諸とも死がひにとりつき身も浮くばかり悲嘆の狀共に袖をばしぼらるゝ、かくてあるに有らざればせん方泣く〳〵茶毘一ぺんの煙りとはなしにける。夫れよりの

ちしばしかほどは恵の祭資料の餘金にて細くも其の日をしのぎしも働く人の無きが上種々の辛苦の重さなりて遂には妻も重き病の床何を云ふにもやう〳〵十三の小娘のみかは乳呑子まで育つる途もなかりける。か丶る折から隣りに住める慾深かき老婆は日頃の不親切に打て變りいとまめやかに尋ね來て云ふよふこの小娘をば、しばらくよそにあづけ其の金にて藥用せばいかで本服せざらんやまたこの乳呑子はほしがる人のありければ幸ひ病ひの癒るそれまでは賴むこそよかるべし跡はわたしが世話をせん必ず心配したまふなと云ふに病婦は喜こびつ丶うそか眞かしらねども危急の塲合を親切に世話して下さる難有やと物云ふ事もかなはねばた丶手を合せて拜むのみ老婆は得たりと心の中ひそかに喜こびつ丶母には手つけの金少しばかりを與へて一こくも早きがよしとて行かじといどむ小娘と乳呑子をおどしつすかしつ無理に引つれ出て丶行く影を見送る母親は病の上にいや增す悲しさ夫が世をば去られし爲め年端も行かぬ子供等を人手に渡す可愛さや前世いかなる罪ありてか丶る不幸に逢ふやらむと泪にくれて伏ししづむ是等の嘆きのさわりしや日每に衰弱いや增して遂に夫のあとを追ひ同じ歸らぬ長の旅あわれといふも愚かなり老婆はいかにして傳手を求めしか遂に小女は橫濱なる支那人に賣り渡しその賣代を着服なし乳のみ子の養育料も拂はねば里親は足手まといと無慘にも乳さへろくに與へばこそ遂に何ほどもなく是れも死してけりさも樂しげに暮しける親子四人の一家の內夫婦幼子は死に果て丶殘る小女は今いづく聞けば淸國へ連れ行かれ憂き年月を送るとかや慘又慘憐れの一家不憫の小女かな。

科　學

軍艦の種類（前號續き）

國木田哲夫

さしもに名高き定遠、鎭遠も第三等の戰鬪艦に過ぎない、然るに我國には第三等の戰鬪艦すら無いのだ。一艘もないのだ。

水兵は慨然として叫びぬ。少年曰く、

然らば彼の『松島』の如き、『橋立』の如き、『嚴島』の如きは、何です。戰鬪艦ではないのですか。

何に、あれは戰鬪艦ではない。彼の三艦は海防艦たるに過ぎない。今君のために、海防艦の事を少しく話して聞かすよ。

海防艦は海岸使役艦の一種である。海岸使役艦を二種に分つ。第一、海攻艦、第二、乃ち海防艦。

海岸使役艦、これ亦た讀んで字の如しだ。常に沿海に出沒して、敵と戰ふのが此種の軍艦の役である。沿海は要するに水が淺いと假定して宜しい。然るに彼の戰鬪艦は吃水深く搆造してあるから、海岸に近き邊、若しくは港灣の中などで、自在の働をなす事は無理である。故に茲に、海岸使役艦といふ種類が必要となつてくる。

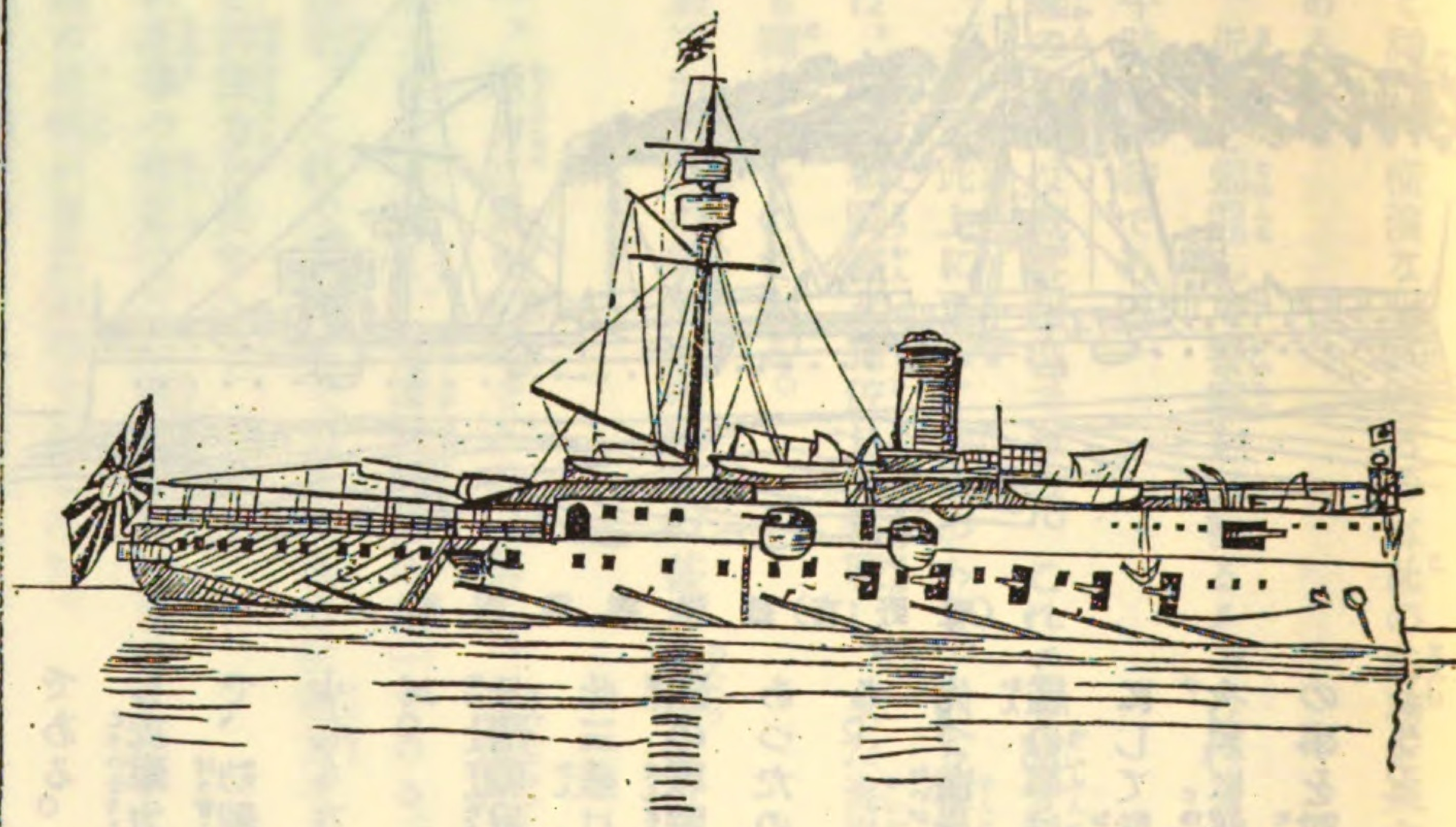
されば第一、海攻艦は敵國の海岸間近く侵入し得るを目的とし、第二、海防艦は自國の沿岸に在りて敵艦を防禦するを目的とするものである。

從て其敵とする處は或は砲臺、或は戰鬪艦、其他敵のあらゆる攻防力である。茲に於てか、海岸使役艦の搆造が多少推測する事が出來るであらう。

第一、吃水淺き事。

若し吃水が淺くない時は、忽ち乘せ上げる。

第二、攻擊力、防禦力の二つが少なくとも戰鬪艦に次



第三圖　海防艦（松島艦）

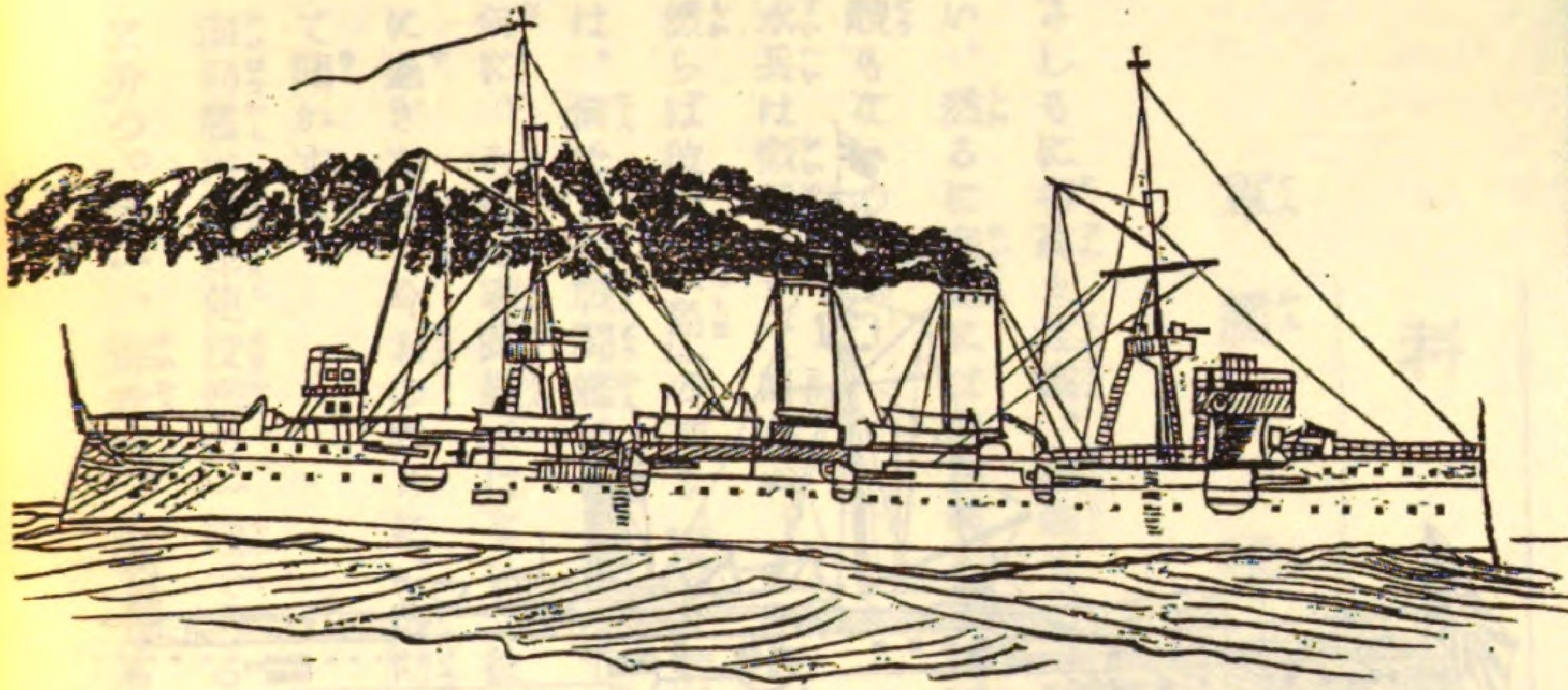
ぐ程である事。

即ち五十噸内外の主砲と、十五吋内外の鎧板が必要である。

此の外に海攻艦、乃ち敵の海岸近く攻め寄する役を務むる船は、遠航性（石炭量）と凌波性と速力とが必要である。速力も十四海里以上はなければなるまい。又三千海里内外の遠航に堪ゆる石炭量がないと困る。されど海防艦には遠航性の必要がない、石炭の如きも時々内地より供給することが出來る。又た速力も海攻艦程でなくとも宜しい。十海里以上で十分であろう。

序でに浮砲臺の事を話すが、此の浮砲臺も亦た海岸使役艦の中に加へて可なるものだ。之れは砲臺の代りに用ゆるのだから砲力が第一である。速力は僅に三海里に過ぎない。去かし浮砲臺の詳はしい事は後とに回はす。

さて然らば。我國の三艦は何であるか。海防艦の名義



第四圖　巡洋艦（吉野艦）

である。志かし攻撃力のみで、防禦力は少しもないのだ。

日清戰争では此三艦は吾艦隊の戰闘艦であつたのである。

先づ海岸使役艦の事は此位にして置き、次ぎに巡洋艦の事を説明しよう。

サテ巡洋艦程、繁多なる役を務むる者はない。戰時、平時常に忙しい艦である。先づ其主務より言へば、

第一、敵の援兵、糧食、砲、銃、彈藥、石炭等を運搬する運送船を、護衛する敵艦を破壊し奪掠するとである。

豐島の役は此の實例である。吾が巡洋艦『吉野』、『浪速』、『秋津洲』の三艦が、清兵千百人を搭載せる高陞號を保護して牙山をさして進行中なる敵艦『濟遠』、『廣乙』、『操江』の三艦を打撃生捕したるは、實に巡洋艦大得意の技倆を示したのだ。

第二、我運送船及び商船を保護して敵艦の襲撃に備ふると。

彼の『濟遠』、以下は此目的を仕損じたのである。

第三、本國人民の移住せる諸國の港灣を巡航して吾人民の自由安寧を保護する事。

これは巡洋艦平時の大任務である。各國の巡洋艦に

して神戸、横濱などに來るのは此の任務を果すためである。

第四、近海を巡邏して警察を務むると。これ又た巡洋艦平時の任務である。

巡洋艦の主務は概畧此位である。これでも隨分忙しい事だ。されど此上に更らに大任がある。則ち戰時に在りては、時に戰鬪艦を補佐して奮戰し、又た海岸使役艦をも補佐するのである。

茲に於てか、其の構造上の特質が甚だ面倒になつてくる。

第一、速力は最も必要である、第二、遠航性、これは言ふまでもなく、巡洋艦特質の最一である。第三、凌波性、これ又た必要である。加ふに適當なる攻撃力と防禦力を要する。

然るに此等の特質は互に兩立し能はざるものであるから、其の比例が實に困難であるのだ。

故に此等の特質を略完備せしめんと思へば凡そ二十五噸餘の主砲、十吋内外の鎧板、少くとも十八海里以上の速力、五千海里内外の遠航力位を備へ、排水量六千噸以上に達するのである。日本にはコンナ巡洋艦は一艘もない。

そこで此等の特質の一二、若くは二三を以て滿足し、一種の長所を取て巡洋艦を造るのである。

此圖に示す『吉野』の如きは吾國第一の巡洋艦であつて、速力は二十三海里、實に立派な者である。去かし防禦力は極めて少ない。攻撃力は十五珊十二珊の速射砲を十數門備へて居るから、先づ不足はない。

巡洋艦にも一等、二等、三等の區別がある。



家政

妻の心得

多くの婦人の疑問なる「如何にせば幸福なる妻となり得べきや」といふ事につきて、近頃バートン、キングスランド夫人か米國家庭雜誌にかゝげられたる所をみるに、言珍しきにあらねど心得となる可き節も多かれば、こゝに其大意をうつしぬ。

○男子は吾妻の己に對して鸚鵡の如く一も二もなく吾言を反響するを欲せざれど、時によりては吾妻の己に從はんことを欲し、己が見識に随ひ、己が意見に同ずるを喜ぶ時あるなり。斯る時に細君たる者、夫に從ひ置けば、他の場合に夫の同意を得ること多し。(與ふるの取りたるを知るは政の實なりと昔の人も言ひき)

○重大なる事にあらざれば、努議論す可らず。また議論の餘り實の入り過ぎざる樣注意すべし。敵對の念一たび起れば、始めは議論なれど、つひに喧嘩に終ることあり。(夫婦喧嘩は兎角何でもなき事より起るなり)

○男子は、自ら言ひしことを、速かに忘るれども、細君の己れに言ひし言葉は、不思議に何時までも記憶するものなり。(故に夫に對する言葉は謹まざる可からず)

○男子は往々口には大聲に云々言募りながら、心にはおのが間違を自覺し居ることあり。細君たる者、少時辛抱して默し居れば、夫は自己の過誤を、言葉には表白さゞるも、實行にあらはすこと往々。(所謂負けて勝つなり)

○夫の弱點をあらはすは、卑劣なる女なり。善良なる細君は、常に夫の長所をあらはす。善良なる細君は、口に追從は言はずして、夫をして最も己れに敬服する者は細君なる事を感ぜしむ。(世間如何に夫の穴捜をな

す妻の多きよ

○細君は常に夫の爲めに、他の善き事を語ることを務めざる可からず。高尚眞摯なる人、淸淨正直なる人、幸福にして互に相愛なる者、質素の生活をなして高尚の理想を有するもの、此等の事を夫の耳に入るゝは殊によし。今日の生存競爭の社會、人と人との戰に於て人間の惡しき側のみを見る夫も、是によりて新に元氣を振起することあるなり。(たま〳〵汗を流して歸り來る夫に對し、隣家の細君の惡口をなし、おのれの不平苦情を云ふなんどは、尤も此敎訓に反するものなり)

○男子は常に細君の己れよりも善からんとを期望す。吾身は如何に無宗敎家なりとも、理想の細君は常に淸淨なる靈魂を有する婦人なり。殊に善良なる男子は、吾細君の道德上己れよりも高貴なるを信ずるの心は、殆んど其宗敎心の一部なり。(細君たる者、恐る可し愼まざる可けんや)

○夫の細君を見るの如何は、細君自ら氣取る所にあらずして、其實相にあり。(故に誠實の必要あり、勉强の大功あり)

○カーライルの言に「敬虔なるものゝ前に在ては、何人も不敬虔なる能はず」といへり。况して男子が其心を與へ家庭の主とせる婦人の敬虔なるを見るに於てをや。男子を善くするものは、會堂よりも婦人なり。(蹶馬破車、悪婦破家、男子をよくするも家を破るも女の力なり、謹む可き事ならずや)

○兎角世間の細君には、男子が變化新奇といふことを喜ぶは、結婚の前も結婚の後も同様なるを知るもの少なきが如し。毎日毎夜同じ衣裳を着、毎年毎年同じ様の髮を結ひては、無論信實なる良人は必ずしも之を嫌ふといふにはあらざれども、斯くては夫の細君に對する注意も自ら薄らぐなり。されば婦人の大事なる一武器も、用ひざる故に銹るなり。(是れ佛國の婦人が結婚

後故らに粉装に注意する所以なり、是れ細君たる者假令飾らずとも氣丈に身のまはりをサッパリ爲し萬につけて亂れざる樣たしなみの必要なる所以なり）

○俚諺に曰く、男子の心を得るの道は、其咽喉より通ずと。又曰く、平生馳走せらるゝ男子は、容易に細君の言に從ふと。これ料理の功力を言ひたるものなれども、男子はまた清麗なるホームを愛し、見るに快よき細君を愛するものなれば、男子の美を愛する性質もまた考へざるべからず。（故に細君は言を子女あるに託して家のうち身のまはりを亂らになす可からざることなり）

雞卵と豆腐は如何に料理せらるゝか

凡そ料理の中にて何が最も多きかといふに、鷄卵と豆腐に越すものあらず、これは何故かといふに鷄卵と豆腐とは、其の一品の材料よりして種々樣々なる料理に使はるればなり、何が故に然るか、これ取りも直さず、鷄卵と豆腐が百珍の料理に適用し得らるゝ性質を有すればなり、西洋の料理中にても鷄卵の多く使用せらるゝは能く西洋料理好の知らるゝ所なり、されば西洋の家庭雜誌などを見るに、料理及菓子製造に關すること項に於て、必らず鷄卵を材料に使ひたる方法多く記載しあり、勿論豆腐は彼地になきものなれば、其料理の欠乏せるは遺憾なり。

玆に吾人は鷄卵と豆腐の百珍の料理ある價値を有する理由を發見す、何ぞや。

（第一）流動躰なる事　雞鷄と豆腐がいろ〳〵の料理に使はるゝ原因は其の流動躰に歸する所多かるべし、勿論豆腐を流動躰と言へば甚だ可笑しく聞ゆれど、豆腐は形はあれど、實は流動躰にも等しきものなり、何となれば豆腐の元素は元々流動躰より成立したるものな

れば、たとひ一定の形を爲すと雖も、之を碎かば微分子となり流動躰にも變するは、臺所に經驗ある細君の能く知り玉ふ所なり、則ち鷄卵と豆腐とは其性質君子に等しく、其の器ならざる所よりいろ／＼の方角に應用が出來得るなり。

(第二)無味なる事　鷄卵も豆腐も無味なり、勿論仔細に賞玩せば、味のなきことはあらず、併しながら、此二品は外に藥味がなければ如何なる味といふ事を味ひ易からず、其者には味の淡きものなればこそ、却つて種々の料理につかはるゝなり。

(第三)滋養分に富む事　鷄卵の滋養分に富むとは玆に言はずとも知れ渡れる事なり、豆腐も他の植物性食物に比し、又其價格の割には頗る滋養分に富めり、世の中には豆腐のみを常食とし、之を十二分の養生品と信じ、身躰の壯健、生命の長壽を保つも往々にして、俗言にも豆腐は鷄卵に亞く養生品となせり、又之を理學的に分拆をしても、其結果は他の植物性食物に讓らざるなり。

(第四)時節を厭はざる事　此二品は時節を厭はず年が年中欠乏を見ざる點は、他の食物と大に趣を異にせり、また不意に來客ありたる節などは、鷄卵ならば、一寸打こわして吸物の主役にても、生鷄卵にしても間に合ひ、豆腐ならば奴豆腐にても煎豆腐にても食するに堪ゆるにあらずや。

右は鷄卵と豆腐が料理社會にて勢力を占むる重なる原因を擧げたるまでなり、試にこれより如何なる料理が此二品によりてなさるゝかを記さん。

先づ鷄卵の部より始めん。

(1)初霜やき鷄卵　鷄卵を破りて殼を去りまだ黄白を攪ぎまぜぬ以前に蛋白分少許を分け取りて別器に移し(蛋白分を分け取り法は、破りたる殼の中にて充分行はるゝなり)斯くして後ち他の蛋黄白分は一緒に攪

き交へ、普通の厚燒卵鷄となし、炙熟するを待ちて、最に分け置きたる蛋白分を平に不同なく其上に流すべし。

(2)淡雪鷄卵　この料理を爲さんには、豫め松魚節の煎汁にて醬液を製し、之を煮立てゝ更に鷄卵の蛋白分のみを別器に移し、茶筌様のものにて、充分之を攪きまはし、器中のもの全く泡花と化するを待ちて右の醬液の中に注下すべし、其狀態宛然として春野の淡雪に髣髴たり、其味淡白なれど、一寸面白し。

(3)かき鷄卵　これは「鷄卵とぢ」と大同小異の料理法なり、唯異なる所は、稍其醬液を多量にして葛粉溶液をひき、鷄卵を入れて後充分に之を攪きまずるも、決して醬液の濁らぬ所が此料理の天狗といふ所なり。

(4)海苔卷鷄卵　鷄卵を薄葉炙となし、其の未だ温氣を失なはぬ以内に、火どりたる淺草海苔の上に展ばし、とも〴〵に卷き、暫時壓重を施こして後、適宜の寸法に切りて食膳に供す。

(5)三十日鷄卵　此料理は日本紙の較厚きものを撰みて一寸立方前後の嚢を製し、只上部の一方面のみを除き、他の降合目は皆縫糸をもて細密に之を縫ひ合はせ、而して後靜に鷄卵を破りて其黄分と白分との混亂せぬやうに徐々と右の嚢の内に容れ更に其の上面なる口の四邊をも縫ひ合て、傾斜又は歪面にならぬやうに注意し、一方に沸かし置きたる鍋の中に嚢のまゝに容るべし、己に烹え凝りて後ち、周圍の紙を剝ぎ去れば、宛然天然の方形卵を煎たるの觀あり、蓋し三十日鷄卵の名の起りし所以は、娼婦の眞實のなきは三十日に月なきと鷄卵に四角なきと同じとの俗諺より出でたるものならん歟。

(6)まるうち鷄卵　これは三十日鷄卵に似たる方法なり、則ち先づ日本紙を以て細長形の嚢を製し、砂糖分量を加へたる鷄卵を攪きまはし、漏斗にて之を合の楮

紙嚢に注下して、熱湯中に入れ煮たる後冷水に入れて外面の楮紙を剝き去れば、丸切の煮鶏卵が製せらるなり。

(7)花形湯煮鶏卵　鶏卵の黄分と白分とのいりみだれぬやうにして、靜に花叉は三日月などの摸したる型に入れ、鍋中にすべて湯煮をする。

(8)木葉燒鶏卵　種々の木葉の形に擬したる型を製し、鶏卵の黄白分を攪和まぜて、これに入れ、普通の厚燒鶏卵を製すると同樣の法を以て燒くを要す、併し此料理はいろ〳〵の型を要すれば普通の家庭にては一寸面倒なり。

(9)金銀接合燒鶏卵　鶏卵の黄分と白分とを別々に分ち、始め蛋白分のみを鶏卵型に入れて火に上せ其の炙熱するを待ちて、俎板の如き平坦にして清潔なるものゝ上に移し、次に黄分のみを右の炙卵型に上せて其のほと〳〵炙熱して唯だ上面のみ未た全く凝固せざるを期とし、前に炙きたる蛋白分を取りて二たび其上に入れ、更に一二分時間を經て後、火より取り卸して俎板には食膳の上に移して放冷す、これは炙卵型さへあれば誰にても容易に出來得るものなり。

(10)にしき鶏卵　鶏卵を殼のまゝに湯煮し、其殼皮を剝ぎ去りて黄分と白分とに分ちて各個に擂鉢に入れてこまかに擂りつぶし、之に砂糖で味をつけ、白分の一半を分ち取りて、之に食料用青粉を擂りあはし、更に臙脂を加へたるものと青粉を加へたるものとの各一半を取りてすり和する時は、都合五種の色彩を得べし、玆に於て壓搾箱を用ひ一種の色彩を一層とし、次第に五種を五層に重ねて輕く壓搾して後、適宜に小口切を爲す、能く料理屋にて口取に用ゐあるなり。

(11)二色まき鶏卵　これも鶏卵を殼のまゝに湯煮し黄と白とを分ちて、別々にこまかに擂りつぶし、更に砂糖の味を加へ、而して後、少しく水氣ある布巾を俎板

の上に押しならし、次に黃分を其上に重ねたるまゝ徐に卷き終り、更に右の布巾を其外面に卷きて輕くおしつけ、布巾を解きて橫切と爲す、これはにしき鷄卵に能く似て手數のかゝらぬ法なり。

(12)母子炙卷たまご　鷄肉をきざみ鍋に入れて煮、醬油と砂糖にて味をつけ、之を笊に移して液氣を去り、又鷄卵をば普通の仕方によりて三分位の厚味に炙き、其の上面の全く流動體を失はざるに當り、右の鷄肉を其面にまき散し、直ちに火より取り卸して徐に卷き輕く壓す。

(13)柚子鷄卵　前法の如く殼のまゝ茹でゝ殼を去り、黃分と白分とを合せ擂鉢に入れて擂りつぶし、適宜に砂糖と少量の擦碎柚子と微量の鹽の三味を加へて擂り合はせ、適宜の木函に入れて、壓榨蓋子を用ゐて壓し固む、柚子の香氣ありて一種の趣味を存す。

(14)たまご饅頭　鷄卵を茹てゝ殼を去り、其の白分と黃味とを各別に擂鉢にてすりつぶし、黃分の方へは單に砂糖を加味して餡の料に充て、白分の方へは砂糖と葛粉少許とを擂りあはして、以て外皮の料に充て然る後、白分を尋常の煎餠程に壓平し、之を黃分をつゝみて饅頭の形に製し、更に蒸籠にふれてふかせばたまご饅頭出來す。

(15)たまご羊羹　鷄卵もて羊羹を製するには、例に依りて黃分と白分とを分ちて、各個に擂りつぶし、其黃分の方へは食料用靑粉を擂りあはして綠色と爲し、白分の方へは食料用臙脂を擂りあはして紅色となし、兩方共適宜の砂糖、少量の葛粉、微量の食鹽の三味を加へ、更に充分に擂りあはして後、各別に型に入れて羊羹の形となし、蒸籠に入れて蒸かすなり。

(16)靑海炙鷄卵　靑海苔を焙り揉みくづして粉末となし、馬尾羅にかけて篩ひ、之と鷄卵と混ぜ合ばして炙卵型に入れ火にかけて燒く。

(17)つみいれ鷄卵　先づたまごを型に入團子程の丸さと爲して燒き、汁の實又は旨煮などの料となす、つみいれの名の起りたるは其形の夫の魚肉にて製する小糝(即ちはんぺん)に類すればなり。

(18)油揚たまご　鷄卵を割りて能く攪き和し、之に糝粉少許を加へ、更に混ぜあはしてべと〳〵となし、食匕をもて適宜に掬ひ取り、熱油に入れて油揚を爲し、之を食するには普通天麩羅に用ゆる醬液につけて食す(天麩羅の醬液は醬油に松魚節と味淋にて味をつけしものなり)

(19)かばやき鷄卵　淺草海苔を適宜の長方形に切り、其一面には攪混したる雞卵を附着し、油揚を爲したる後、更に稀醬油に浸し、焦げつかぬやう炙るべし、一寸した肴に妙なり。

(20)礒炙たまご　鷄卵を解き淺草海苔の焙りて揉みくずしたるを適宜に混和し、炙卵型に入れて炙くなり、其の食用法は普通の炙たまごと異ることなけれど、『行水や何にとゞまる海苔の味』といふ風味ありて面白し。

鷄卵の料理は之にて筆を止め、豆腐の料理は如何なるべき。

(1)昆布卷豆腐　先づ適宜の柏子木形に切り、又た灰の上に紙を布き之を列べて充分水氣を吸ひ取らしめ然る後清潔に洗ひたる昆布を以て縱に右の豆腐を卷き、細く裂きたる昆布を以てそれをくゝり、充分に水煮を爲し、昆布の烹熟するを待ち、醬油を入れて二三十分間も煮るべし、これは昆布の味をして充分豆腐に浸染せしめん爲めにて又自ら一種の風味あれば、精進料理には妙なり。

(2)つのあげ豆腐　豆腐を七八分位の立方形に切り少時水氣を去りて後、葛粉の小塊の上にころばし、葛粉の粘着したるまゝ胡麻油にて揚げ、山葵醬油などにて食すれば頗る面白し。

(3)味噌漬豆腐　豆腐を適宜の柏子木形に切りて一たび湯煮をなし、更に充分冷却して後、日本紙に包み、味噌の中に漬つ置かば、これ亦風流の味なり。

(4)松葉豆腐　細切昆布を清潔に洗ひ清め、銅鍋に入れて水煮すれば鮮美なる緑色を呈すべし、豆腐を製するの初より、右緑色の細切昆布を二寸前後の長度に切り、適宜に其の中に入るゝ時は、此昆布はたがひちがひに散亂して宛も緑松葉を散布したるが如き狀を爲す、然れどもこれは豆腐製造する時にあらざれば出來難し。

(5)泥鰌豆腐　冷豆腐と活きたる泥鰌を鍋中に入れ火に上せて煮る時は、熱度の次第に加はるに從ひ泥鰌は其熱に堪えずして豆腐の中なる冷處を逐ひ自然に豆腐の體中に入り、終に豆腐と共に烹熟せらるゝに至る、其の烹熟するを待ち醬油を和して鹽梅を爲し、放冷して後適宜に之を切る時は、奇なる料理なれど、隨分罪障深き手段なり。

(6)きぬこしまがひ湯豆腐　豆腐を五六分許に賽目に切りて湯煮し、重炭酸曹達の微量を其鍋中に投ずべし、斯くする時はたとへ長く煮るも其豆腐は稍柔かにして絹帛濾と異なることなし。

(7)たまごやき豆腐　豆腐を布に包み壓搾して水氣を去り擂盆に入れて擂りつぶし、之に食料黄色顏料と砂糖とを適宜に加へて細に擂りまぜ、隨意の形に造へ湯煮と爲し、已に煮熟したる後、更に火にて炙き適宜に切りて器に盛る。

(8)團子豆腐　豆腐を布に包み、壓搾して水分を去り、又擂鉢に入れて擂りつぶすこと前法の如くし、更に砂糖を加へて充分にすりまぜ、然して後適宜の團子と爲して青竹の炙串に串し、火に上せて少しく焦るまで炙き砂糖醬油をつけて、また其の醬油の乾くまで炙き、串のまゝ器に盛るを團子豆腐とはいふなり。

(9)むすび豆腐　豆腐を細に擂りつぶして之を細長形の日本紙嚢につめ、微温湯の中にて随意の形に結び、以て湯煮を爲して後、其紙を剝ぎ去り更に醤油などを加へて煮るべし。

(10)おぼろ豆腐　豆腐を鍋中に入れて湯煮を爲し、其の固まるを待ち、鍋中の湯を去り、豆腐を碎きながら更に其水分を去り、然る後、適宜に醤油と砂糖とを加へて加味し、之を擂鉢に入れてすりつぶし、また鍋中に入れて火に上せ、飯匙子を以てよく攪きまはしつゝ、其の水分をも去り、又た凝固さざらしむるやうにし、尚ほ又た擂鉢に入れて擂つぶしたる後食料臙脂少許を加へ充分攪きまはせば丁度鮓につかふ鰕のおぼろと同じき觀を爲し、精進料理に遣はるゝなり。(11)卷鮓豆腐　豆腐を鍋に入れ湯煮を爲して其の固まるを待ち水を去りて豆腐をこまかくくだき、適宜に醤油、酢、砂糖を以て加味し、更に能く水氣を去り、而して後圓柱形の布に卷き匡に入れて壓搾し、已に凝固するを待ちて布を解きほどき、淺草海苔又は薄葉炙卵にて卷き、適宜の輪切を爲せば、口取などに宜し。

(12)茶筅豆腐　來客などの節一寸間に合ふ豆腐料理なり、これは豆腐を尋常の短冊か賽目に切るは面白からずとて、汁は誰も知る松魚節の煎汁に、豆腐を短く大き柏子木形に切りたる一端より縱横幾條かに刻みて其半身に達せしめたるものを入れて出す、茶筅豆腐と稱するはこれなり。

(13)鼈甲豆腐　豆腐に木耳、椎蕈、麻子等適宜の物を加へて俗にいふいり豆腐と爲し、別に寒天を煮とかし砂糖を加へて甘味をつけ、馬尾羅にて重箱の如き内面平滑にして且つ方形なる器中に漉し入れ右の炒豆腐を其中に撒き散して沈下せしめ、充分放冷して後適宜の形に切りて器皿に盛る精進料理の口取などに妙なり。

(14)しぐれ豆腐　豆腐を適宜に切りて香湯となし、之

 (三二)

に蛤蜊の肉を入れ小鍋にてフツ／＼煮て食す。

(15)磯あられ豆腐　蛤丁と豆腐とを香湯と爲し、淺草海苔をかけたるをいふ、其の味淡泊にしてなか／＼美なり。

(16)甲子豆腐　豆腐を湯煮と爲して後、器に盛りてよく其水を去り、之に豫製せし「くずめん」をかけて下飯に供す、則ち「あんかけ豆腐」これなり、蓋し「くずめん」とは葛粉を適宜に水に溶き之を醤油と砂糖少許とを加へて火にかけ攪きまはしながら、煮てどろ／＼と爲したるものなるが、時としては豆腐を普通の香湯と爲し、之に水を以て溶きたる葛粉をそゝぎて前後の手數を省くもあれど、其味は大低違はず。

(17)胡麻かけ豆腐　豆腐を湯煮すること猶ほ甲子豆腐に於けるが如くし、これに胡麻醤油をかけて食すまでの相違なり。

(18)ぎせい豆腐　まづ俗にいふ「いり豆腐」を製し、將に火より取り卸ろさんとするに臨て饂粉少許を加へ、其の冷めざるに及びて、木匡に布巾を布き、右のいり腐豆を入れておし固め、而して後、適宜の大きさに切りて食するなり。

(19)山家腐豆　是は至て手輕き煮物にて、常の白豆腐を丸にて空なべに入て、銅杓子にて潰し火にかけて煮は汁出るなり、其へ豆腐一丁に猪口に一杯の割かたに醤油加へて能煮あげるなり、山椒粉を入るもよし、又煮上るとき鷄卵の溶解たるを入て混和してよく、又生湯葉か干ゆばを水に浸柔かに成たるを細に刻みて入まぜるもよし。

(20)味噌かけ豆腐　白豆腐にても、燒どうふにてもよき程に切、湯煮として椀に盛とき、汁の溜らぬ樣能したみ取り、風呂吹の如く味噌をかけるなり。

(21)豆腐せんべい　豆腐を搾りて水分を去り、擂盆に入れて擂碎し、又葛粉と砂糖とを加へて充分に擂和し、

然る後手掌を以て適宜に鬆糕の形に製して茹で、更に火に上せて兩面を熬るべし。

右は鷄卵と腐豆各々二十種の料理を撰みたるに過ず、此外通常人の知りたる料理及び甚だ煩雜を極むるものは畧せり、此二品の料理社會に於ける勢力盛なりと謂ふべし。

脚氣病

本年は恐るべきコレラの流行と共に脚氣病も亦流行し殊に本年は甚だ惡性なるが如し、脚疾は通常風土病と稱せられ、太氣の乾燥若しくは天候の寒暖及不時候によりて流行するものなれば、亦流行病の名あり、依て流行病と斷定せし醫家もあり、然れども之に反して脚疾は中毒性なりともいふ、吾人は讀者の參考のために二説の大略を語るべし、前者則ち脚疾は傳染すべき性質ありとの説に曰く、凡そ傳染性ある病毒は必らず一種の「バクテリヤ」なることは世人の能く知る所なるが脚疾患者の屍體を解剖して其脊髓中に一種の「バクテリヤ」あるを發見せし事實尠なからず一方に於ては脚疾は海濱住民の魚毒に罹るといへども、信州輕井澤の如き山間の僻地にして、空氣水質共に清新を以て稱せられ、四方瀕海の地と相距る三四十里乃至二百里にして古來脚疾の特發したるを聞ず、然るに近年同地と交通の便開けてより脚疾患者の此に轉地療養するを以て漸次に脚氣患者を生ずるに至れり、又屍體を解剖して其脊髓中に得たる「バクテリヤ」は、之を取りて他の動物即ち犬猫羊豚の獸類に種ゆるに人類の脚疾に等しき病狀を呈すといふ、脚疾の病毒則ち「バクテリヤ」は圓柱形のものなりと。

脚疾を以て中毒性なりと爲す者の説に曰是魚類の毒に中るより發するものにして、中に就いて無鱗魚すなは

ち鰻鱺類、泥鰌、松魚、鱭魚、鯰魚、魴魚、鱣魚、海鷂魚、鯵華臍魚、胡沙魚、馬鮫魚、青貫、鱘魚等を殊にはなはだしとす、即此の症を患ふる者の瀕海の地に多くして、山僻の地に少きが如き及近年我が邦俗の日に奢侈に流れ名を衛生に假りて多く魚肉等を食ふこと昔日の比に非ざるに至りてより、之に罹る者の數頓に多きを加へ、而して我が海軍省の海兵に給するに多く獸肉を以てして魚肉を給することを廢し各監獄の多く魚肉の類を囚徒に給するとを爲さゞるよりして此の症に罹る者の少きこと、衛生上他の諸般の用意周到ならざる所なきを得ざるに似ざるが如き皆以て魚毒の之が原因たるを證するに足れり、若夫近年山僻の地に於て往々此の症に罹る者あるは陸運の便やうやく開くるに隨ひて瀕海の地に獲る所の魚類を運輸して以て彼に移し彼魚肉を求むるに道なかりし者をして隨意に之に飽くことを得せしむるに至れるが故のみと。

右の兩說は宛も癩病は傳染性の病症なるか、魚類中毒の作用なるかと未だ確に判別せざるが如し、吾人は醫家にあらねば、詳細に之を研究するの必要なけれど、吾人は此脚疾を豫防又は治療するの手段なかるべからず。

脚疾は他の病と違ひ氣分平生に異ならずして(異なるも當人は氣の附かざるため)俄に衝心して死に至るものあり、此病の兆候は食慾減少し身躰倦怠し又大便秘結し小便の量を減し、手足の指趾しびれ、且つ口唇下腹痲痺し、胸部苦しく動氣穩ならず衝心するが如き氣味あり。

かゝる兆候あらば身躰を安靜にし、歩行勞働を止め、麥又は挽割麥飯、小豆、粥、鷄卵、肉羹汁等成るべく消化し易き飲食物を用ゐ、必ず熱物を用ゐず、脚疾中は秘結の恐あれば、「カルヽスセン」一匕を水にて夜間睡眠前に服用するか、醫師より通利の藥劑を求め、常

に大便の秘結せぬやうになさば衝心の患なし、動氣高ふらば其部を氷嚢にて冷却し、若し又呼吸困難ならば胸部に芥子泥を貼るべし、脚疾は藥劑よりも山間高地などに轉地するに越したることなし。

手藝案内

造花術

用品使用法

前號の紙上には造花術の用具などを案内せり、これより次第に歩を進めん。

寒冷紗――寒冷紗は普通花瓣を作るにのみ用ゆる處にして、たま〳〵葉にも用ゆることあり、而して此造花術に使用する寒冷紗も通常のものにあらずして、羽二重寒冷紗を用ゆるを可なりとす。

さて如何にして寒冷紗を花瓣と爲すべき、則ち先づ見分量にて、其の要するだけの大きさに切り、其の要する色に染め、充分乾かしたる後、之を打貫臺にかけて打貫くか、又は瓣の摸形によりて裁ち、鏝にて窪まし或は縮ましなどす。

色に染めて之を乾燥せしむるには大陽に曝せば、色澤變褪せざれど、雨天又は至急を要する場合に於て、火熱の力によりて急に乾す時は、たま〳〵火に感しやすき色あれば、成るべく大陽に乾燥せしむるに如かず、花瓣を半分或は瓣尖のみ染むるものは、先づ地の儘にて切り裁ち、後に染むるが得策なり。

ぬめ――其用處は寒冷紗に等しく、其用法も大抵寒冷紗に異ならず、唯だ一つ注意すべきは、絖は頗るほつれやすきゆゑ染めぬ以前に於て、寒冷紗を以て裏打すべし、其方法は絖を臺上にのぼし置き、稍や濃き姫糊を刷毛にて布き、其上に寒冷紗を貼るべし。

ぬめは寒冷紗と等しく葉に用ゆることあり、葉に用ゐ

んとならば、花瓣に等しく寒冷紗にて裏打を爲し、染め乾したる後打貫き或は切り裁つべし。

ケヤラコ――ケヤラコは人の能く知れる西洋の木綿なり、造花術には重に葉に造るに用ゐ、花瓣に使用すること甚だ稀なり、ケヤラコを染むるには先づ「アヲタク」(繪具)にて染むるなり、これは葉裏の色を出す者なり、次に獅子を以て張り、是に白墨粉と姫糊を溶きたる濃き者を刷毛にて塗りかはかすべし、斯の如くする時は、固く板の如くなるなり、次に獅子を解き繪具を膠にて溶きたる者を塗り、後に打貫き又は模形によりて切り裁なり、筋をつけるには筋鏝もて葉條をつけ中央の條の部分には銅線に青紙を捲きたる者を裏より附着し、幹に取りつける者なり、是は蒂に用ゆるともある。

羽二重――羽二重も亦花瓣及び葉に用ゐらるゝなり、其用法はケヤラコと同じくして、裏打をなすに及ばず上等の造花の材料たり。

木綿糸――木綿糸は蘂に用ゐるものにして、花の種類によりていろ／＼に染むるなり蘂の尖に附きたる白點は花によりて罌粟粒等を染め、糊にて蘂の尖に附着す、其他菊、椿の如きは粟粒を用ゆるなり、梅は兎毛を用ゐ、尖に糊に黄粉を混ぜてつくるなり、木綿糸の代りに器械糸を用ゐることもあり。

さらし臘――すべて葉により光澤を出す時に用ゆるものなるが故に、仕上げの後溶解したるものを筆又は小刷毛にて塗るなり。

ゴム――ゴムは幹及莖に用ゐたる細管を作りて鬻ぐ店あり、求めて適宜の色に染め、中に銅線を通して萼の端につける、萼はゴム製もあれば又厚紙製もあり、厚紙製ならば自ら作り得らるべし。

白紙――白紙はいろ／＼に用ゐるなり、多く適當の色に染め、蒂又は椿などの蘂に用ゆ、又たま／＼葉に用ゆることもあり、而して幹、莖などは適當の色に染め」

たるものを鋼線にまきつけて使用するなり。

模形――模形とは花瓣、葉などの模形なり、模形は實物より外なきものなれども、たま〳〵花の乏しき時節、時ならず花を造り出さんには、模形によりて造るを便宜なりとす、模形を造るには實物より取り置くに越したることなけれど、畫工に賴りて畫かしむるもさまたげなし。

元來造花の美術を學ぶには實物則ち眞實にせまるを最上とするものなれば、實物を持ち來り寫生畫を爲すが如く、作者の坐傍に置きて工夫鍛練するが宜し、而して其花を解きほとき一々之を模形となし。又現物の如く纒めると宜しとす、又常に多く使用し、或は其形屈曲多く切出すに困難なるものは、之を打貫に製し置き隨意に打取り貫くを便宜なりとす、模形の種類は數限りもなきものなれば、常に實物によりて多く好き模形を取り置くべし。

社交一斑

流行の栞

贅澤なる夏羽織　春夢

予近來劇場又は宴會等晴衣を競ふ社會に入りて目に觸るゝは贅澤なる夏羽織の流行これなり。

さて贅澤なる夏羽織さは、絽市樂の無双仕立なり、絽市樂さは婦人の夏の半襟に用ゐて當節の流行を極むるものにして、其價も甚だ廉ならず、此高價なる絽市樂を黒の五ッ紋に染め、無双仕立則ち袋仕立（表さ同じ地にて裏に引返して裏布帛を用ゐぬ仕立をいふ）にして、最も多く目に當る胴の模樣は秋草か、那須ヶ原か、藤に瀧津瀬、浪に千鳥、水に杜若等の曙染なり、此胴の模樣が模糊さして表よりチラ〳〵見ゆる風流は、何さも得言はれぬ趣あり、併しこれは通人さか粹人さか呼はせらるに御方が召し玉ふものなり。

夏羽織さして此程贅澤なるは他に匹敵を見ず、入尺四丈物にて一枚を仕立て得るさして、此價格は白地にて十三四圓、染代は三圓より五圓なりさ言へば、仕立揚までは、ざつて二十圓の費用を要するなれば、着物に有り

餘れる贅澤三昧の人ならでは、かゝる高價の羽織を着くるものなし。

亞麻織

昨年頃より流行する麻亞織の帷子を見るに其品質も宜しく染料の色澤も亦鮮美なり、此衣物は單衣ともなり上布としても着られ、男女とも着用し得らる、其價格は品質の割合に安廉にして、一反二圓より三圓位にて手に入れば、低價なる薩摩絣の直段と同樣なり、但し此亞麻織の原料亞麻は西洋種を我國に植ゑて意外の好結果を得たるより、此新機を出すに至りたりといふ。

再び信玄袋につき

前々號の紙上に『信玄袋』といふ手提の流行を記したり、然るに此頃佐竹商店製の信玄袋を學びて、同じく『信玄袋』と稱する手提出で、而も甚だ平民的なり、同店より發賣する高麗木綿製は一圓五十錢內外なれど、新しく出でたるものは、同じ大きさにて三十錢以上より五十錢以內にて求めらる、素より其布帛地は更紗木綿なれど、外見を厭はず實用のみを尊ぶ向には之にて澤山なり。

驢馬と小兒

日清戰爭全く結局を告げ在外日本人が凱旋歸朝してより、能く眼に觸るゝは驢馬を清國より連れ歸りて、小兒等の遊戲相手とし、小兒を載せ或は小さき馬車を牽かす、驢馬は柔弱の動物なれば、却つて大なる犬より危險なし、犬よりも危險なきと同時に價も亦廉なり、戰爭中清國にて一頭二十錢なりし由なれば、澤山日本へ連れ歸りしもの多きも宜ならずや。



入谷の朝顏（人形細工の流行）

朝顏の本場なる入谷各所の植木屋は培養に十分手を盡す爲め本年は照り込みも少く朝顏に取りては餘り宜しからざる氣候なれど其出來榮へは案外に宜しく昨今メキ〳〵と幹太りて本月に入りなばポツ〳〵と咲き出したり先年より朝顏人形にて入りを取りたる松本德次郎方にては本年も日清事件を仕組むとて目下職人を入て二ヶ所に看覽場を設け準備中なり他の開園と同樣今十日頃開場する由其細工は松本家方には表に朝顏の大緣

門を設け其内部は日本斥候騎兵乘馬の將校威海衛の雪中偵察の塲（左團次似顔）左甚五郎（團十郎）人形（榮三郎）を彫上げ酒宴の塲等松本分家の方には玄武門先登兵の重吉（菊五郎）滿州騎兵、樋口大尉（三河屋九藏）支那の小兒を抱て奮鬪の塲、八重垣姫（福助）源三位頼政（權十郎）鵺退治塲にて猪の隼太（訥子）等の似顔なり。

含珠燒

京都に開會せし第四回內國博覽會以來、磁器社會に一新磁器を加へたる含珠燒は、此道は人の嗜好に適し、追々勢力となるに至るべし、茲に含珠燒が如何なる辛苦經營を經て始めて成功したるか、其經歷を語らん。

抑も含珠燒の發明製作者は佐賀縣の人樋口治實氏にして氏は同縣の士族なるも、鍋島家の舊例として、陶磁器の製作に限り之に從事するを得べき特例を士族に與へし故を以て氏が家世々陶器の製作を業とし、降て氏も亦成立の後ち其家業を襲ぎ、奮發勉勵斯業の改良發達の爲め大に力を盡す所ありし、其清國への輸出に就き氏が爲したる種々の計畫を始めとして、終に同國に渡航し以て商業の視察販路の擴張に力を用ゐし如き不幸にして好結果を見るに至らざりしと雖も、此の間氏の身邊に纒綿したる内外公私の事情は氏をして更らに苦心せしめ其慘憺の情多々察するに足るものありたれども此の如きは暫らく擱き右含珠燒の一事を畧記せんに氏は兼て發明の志を懷き、古來世間に在り觸れたる古人の筆法に依るを屑とせず、何等か稀有の一新物を製作せんとの企望常に其胸間に往來し須臾も止むときなかりし折柄、曾て一小磁器の中櫻花燒の燒瑕あるを見るともなしに見當り、尙ほ之を手にして熟視すれば其花燒の所燦然透明の態を爲す氏時に玩味すること良々久し、忽ちにして以爲らく、今此の燒瑕に擬して燦爛たる透明の花形を磁器に顯はす是れ亦た一種の新法ならずやと、時は恰も明治十三年今を距ること十五年の交なりし、顧ふに古來何種の業に係はらず、發明少なからず唯だ其結果に就て觀るときは、事誠に容易に似て多くは偶然に出づるが如しと雖も、仔細に其事の顚末を考査するときは決して然らざるを知る、其恰も偶然なるが如きは唯だ事の發作のみ社會の事物一として豈に原因なきの結果あらんや、則彼の燒瑕の如き氏が多年懷抱せし發明心の導火線と爲り會々其宿志の發作を促したるのみ、左れば氏は爰に始めて發明の端緒を開きし以來經營慘憺千思萬考千々に工夫を凝すこと殆と七年間、資力も將に盡きんとする折柄明治十九年の春櫻花爛熳の好時節人は頻りに花に醉ふ氏は日夜工塲の一隅に坐を占めて幾多の職工を使役し、專心一意

其業に從事し多年の宿志漸くに其結果を見んとするに至れり、即ち含珠燒第一着の發明を遂げたるは此の時なり氏の喜悦察すべし、直に專賣特許を出願し、越いて二十年十二月許可を得るに至り、其翌年三月尙ほ新工夫を加へて菊桐御紋の透明を顯はしたる一種の水呑を製造し、之を宮內省に奉呈したるに賞賛斜ならず、爾後同省の御用製造を命ぜられたり、氏は愈々感激に堪へず益々精勵して、更らに精良品を製し先づ其献納を了せし上愈々世に公にする所あらんと欲し、欣然命に從ひ透明鉢菊桐花瓶の製造に着手し、其第一回の製造に既にして燒終しも氏の慾を滿すに足らず第二回も亦未だ氏の慾を滿すに足らず、三回四回改作恰も十四回に及ぶ、此間三年の星霜を費したり、爲めに資力も欠乏し殆んど堪へ難き苦心の境遇に切迫したり。時に明治二十三年四月

天皇陛下佐世保に御臨幸の事あり縣下の商工地方の特產を天覽に供すべきの命あり、恰も好し氏が三年來の苦心此の時最終の改作氏をして稍々滿足せしむるの結果を見るに至れり、此に於て氏は含珠燒菊桐御紋の花瓶一對を謹で行在所に奉呈するを得たり、幸に御嘉納在せられ氏は身に餘るの榮譽と爲し更に亦同年六月　皇后陛下に同樣の花瓶一本を奉呈したるに、是れ亦御嘉納の榮を辱うし、續て宮內省の命に依り雲中に鳳凰模樣の透明を顯す花瓶の製作に從事したり、意匠愈々進んで技術の益々難きを覺い亦再度の研究に時を毀すこと三年、即明治二十五年六月に至り漸くに其完成を告げ献納を全うしたり、此の如くにして前後十有餘年の間、苦心精勵、爲めに氏の股肱とも賴むべき名工松岡某は命を亡ひ且つ腦病に罹りしもの三名、氏は既に多年の宿願稍々成就せし大喜悅と同時に股肱の名工を亡ひ之加多年の間氏の全心全力は唯だ陶器製作の一點に注ぎ其他を顧みるに暇あらざりし爲めに數十町の田園も數ヶ所の山林も全く賣り盡して、尙ほ且不足を感ずるに至りぬ、勢ひ此の如く切迫し親戚は來つて其無謀を咎め朋友は來つて其無策を諫むれども聞かず、時に明治二十六年米國シカゴに於て世界大博覽會あると聞くや氏以爲らく好機失すべからずと忽ち其用意に取掛らんとしたれ共、先だつものは資本の一事、終に家具什物迄も賣拂ひ之れが資に充てんとしたるも、尙ほ且つ不足を告ぐ茲に於てか已むを得ず愿志の在る所を具さに認め一書を其筋に呈して只管ら乞ふ所ありしに、當局亦能く見る所ありしが容易に其乞ひを容れ、且つ同縣下に東島猷一郎氏なるものあり義俠を以て知らる、猷一郎氏又大に其熱心に感じて之を助け加之農商務省よりも又氏に向て注文する所あり、旁々以て氏は少なからざる便利を得速に用意も調ひ、彼の含珠燒氏の生命にも代へ難き此の發明品を始め其他若干自作の陶磁器を取揃へ結裝して、之を出品總代

松尾某氏に托す、某氏間もなく渡米の途に就く、須臾にして海陸共に恙なく彼の地に到着せしとの報に接す、斯くて米國閣龍世界大博覧會に於ける樋口治賀氏の出品に關する結果は如何、審査結了結果の一報彼の地より至れり、此報告は寧の結果成効を告ぐるの一報にして氏をして稍々得意ならしむるの吉報なりし則ち「日本佐賀樋口治賀の出品に係る純白透明なる小形の陶器に花鳥の摸様を寫し出せし透明の態意匠頗ぶる美にして妙なり千八百九十四年三月十四日米國閣龍世界大博覧會審査官エム鹽田、事務官長キムボール、褒賞事務長ジオンボイド、サッカー」と記名したる此の一通の通知書氏の座右に達するや氏は欣然之を手にし一讀微笑して曰く「今此の審判の吉報に接す、多年の勞苦稍々余をして慰むるに足る、然りと雖も最後の審判は普く世界の需用者にあり、想ふに今回米國博覧會は所謂世界の大博覧會、今夫れ同會の審査にして樋口が意匠美にして妙と審判す、余が心余をして稍々満足せしむるに似たりと雖も此の如きは畢竟有數の審査官が有限の知識を以て爲したる卓上審査の結果に過ず、余は未だ最後の審判官たる需用者實地の審査に依り、果して彼等の賞賛好評を博するにあらずんば余が志決して満足する能はず、されど兎に角今日の時運に至りしものは彼の地下に在る名工彼等の力與つて少しとせず、今此の賞狀を得る一讀して地下に彼等の靈を慰む亦是余の義務にあらずやと起て彼等の佛前に至り、慨然として朗讀する事一過、時に米國の市場は銀價の變動に際し頗ぶる冷況、博覧會の如きも亦概して出品の賣口面白からず爲めに幾多出品者の殘品を各々其自國に廻漕せしもの少なからずして、中にも非常の損失困却せしものありしに拘はらず、意外にも氏の出品物は殆んど全く賣盡して、殘品僅に一二に過ぎざりし尋で同國加利保留尼亞州桑港ゴルデンパークに開設の冬期萬國博覧會に出品し此に於て得たる結果は曰く「陶器の製造佳にして美」と而して其總裁エチ、エイ、デヨング氏を始め賞與委員諸氏正に審査の薦告を領し賞狀并に金牌を氏に向て賞與したり、時に千八百九十四年九月第一日なり此の如くにして毎年の間經營慘憺たりし氏の工場も今は稍々内外の注文に遇ひ中にも去年九月の頃とかや在横濱米國領事の婦人なる由、シドモアー氏なる婦人の如きは、遥々氏の工場を尋ね來り數多の買品且注文したり又今回の博覧會出品の花瓶一本（百五十圓）コーヒー猪口半ダース（三十六圓）水呑二個の如きは（十圓）先きに皇后陛下行啓の際畏多くも陛下の思召に適ひしや御買上の榮を得たりと云ふ、嗚呼氏が苦心經營我工業界に一進歩を與へたる功績埋沒すべからず。

日用品物價（七月六日）

◉白米小賣相場（七月三日ゟ改正）
一圓に付 ◉一等白米七升七合（二合高）◉二等白米八升（二合高）◉三等白米八升五合（二合高）◉四等白米九升（二合高）◉五等白米九升四合（二合高）

雜錄

東京府下の女學校

◉共立女子職業學校

◉位置　神田一ツ橋通町二十二番地

◉建築　外見甚だ美ならざれども、內部の組織は整理せるが如し。

◉目的　女子をして自活の途を得しめんため、職業を授くるにあり。主義の如き固より定まれるものなきが如し。故に其の風儀等も之を詳にするを得ず。

◉歷史　創設は明治十九年に在りて、當時の校長は今の巖手縣知事服部一三氏なりき。爾來學年を累ぬる九、四百六十餘名の卒業生を出し、現今四百人十餘名の生徒を有す。時の趨向の致す所か本年の如き入學者特に多くして、漸次進步の中に在り。

◉學課　甲乙の二科ありて、甲科は一科若くは二科に限り、乙科は一科に限り撰修するものとす。兩科共に裁縫、編物、刺繡、造花、圖畫を授け、傍ら日常必須の修身、讀書、習字、算術、家事、理科を授く。修業年限は甲科三年乙科二年とす。但だ圖畫科は甲科四年乙科三年なり。別に家政科あり。生徒中の志望者にて高等小學卒業以上の實力あるものに家政のことを授く。又毎月數回人員を限りて割烹術の敎授あり。入學せんと欲するものは、多少讀み又書くことを得る者なるを要し、甲科は十二歲以上乙科は十五歲以上のものに限る。又地方敎員等にして之に入學せんと欲するものには、

速成の途も備はれり。

◉經費　入學の際の束修金は甲科一圓乙科五十錢にして、授業料は一ヶ月、甲、一圓三十錢、乙、八十錢なり。寄宿生は四圓の寄宿料を要す。此の校は市内のもの、外通學を許さゞれば、地方より來るものは、必ず寄宿せざるべからざる條件あり、此の外に受業用書籍器械の費用に各科通常四十錢乃至八十錢及筆墨料若干を要すべし。又造花科は此の外に入學の際器械調製のため二圓五十錢を要す、刺繍科は八十錢を要するとあり。

然れども造花科に限り、二十名以内に於て貸費生なるものあり、此等は月謝を免せられ、器械、書籍等受業用必要の物を貸與せらる。

◉校長及教師　校長は工業學校長手島精一氏の兼任する所にして、教員は學科に六人、術科に十八人あり。

那破翁の逸事

志ばのや

那破翁一世が「セント、ヘレナ」島に追放せられし時將官「ベルトランド」の細君に就きて英語を學ぶに餘念なかりしは世人の熟知する所なり當時練習したる作文幷に一二の書翰を得たるに頗る面白ければ譯しぬ

貴君は何れの時分別が附きますか

最早此島に滯在するの必要なき樣になりし時に

此線をさへ踰えなば赤元の余じや

余は佛國に上陸するや如何に甚た滿足ならん妻は我許に來らん男兒は成長しありて晝食には余と共に彼が手にする葡萄酒を飲干さん母は老ひ給ひ姊妹は—氣の毒なれど美しき色あせつらん總て女子と云ふものは常に自惚れ强ければおしやれだろ—

此反譯は英語にて二三行に那破翁に固有なる拙字にて

書しありて過失は中々に多しと見ぬ此文を見るに那破翁は是非本國に歸らんとの希望は終始止まざりしと明了にて初めの文章「貴君は何れの時分別が附ますか」とは那破翁に近侍する人々が那破翁の激怒せし時なぞに慰藉せんが爲めに用ゐたる言辭ならん

帝が眞蹟は概して世に傳はる者少なきが皇后「マリー、ルイ」へ宛てたる二通の書翰を見ぬ一は「エルバ」島より歸りつる日に認めたるものなり

余は全佛國の主人なり人民と軍隊は激昂しありて王と自稱したる人は英國に逃走しぬ我が舊知なる近衛は一人も殘らず余が許に來りぬ余は毎ねに二萬五千の兵を閲して日を暮せり余は四月に汝を待つなれば同月十五日或は二十日に「ストラースブルヒ」に來れ能く暮らせ我戀人よ

三月二十八日　余は永久汝の　那　破　翁

我愛する「ルイ」よ

其後「マリー、ルイ」は此請求に應ぜざりければとて出したるは此第二の書翰なり

余は汝に度々音信せり三日前には余が近況を報じて安心させん爲めに態々使を遣りぬ余は人民の請願を容れて權力無限の統治者となりぬれど獨り物足らぬ心地するは汝と男兒なり故に直様來れよ恙なく起居せよ

我の愛する「ルイ」よ　余は汝の　那　破　翁

南　信

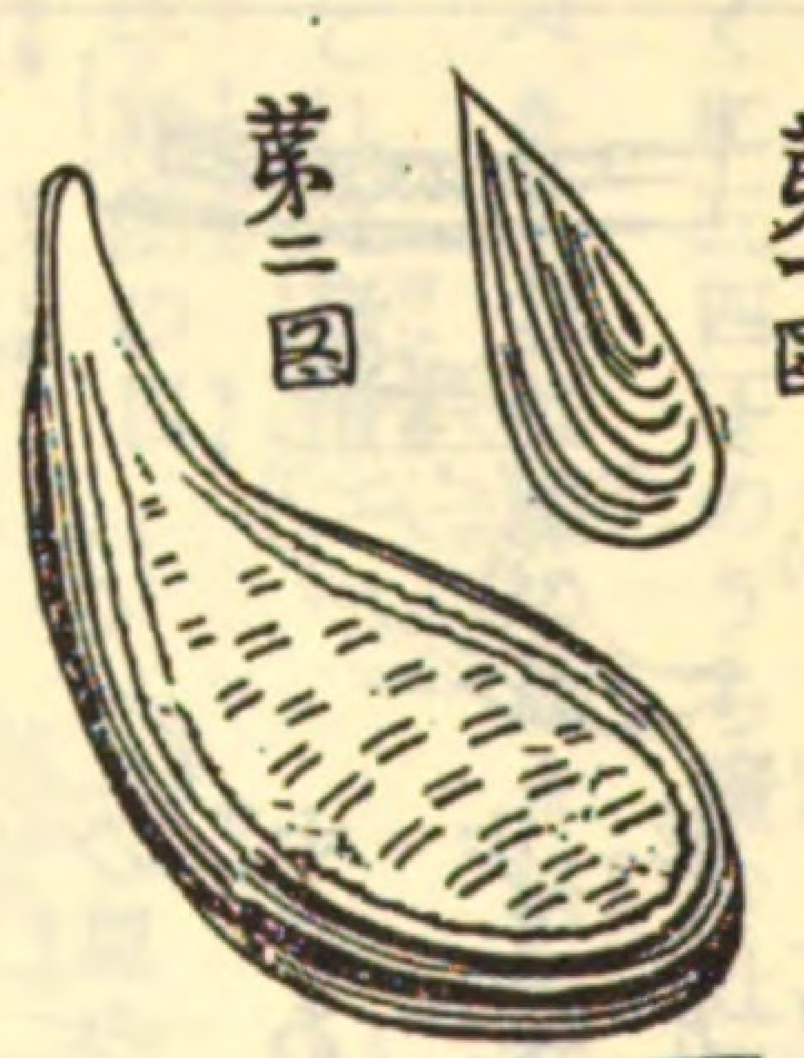
在臺灣近衛歩兵　久 留 島 武 彦

鷄籠も陷落し臺北府も占領し淡水も我が手に入りしより茲に一先づ段落のつきし如き感いたすと共に一兵卒の身にも少々閑暇の出來候まゝ今日迄見來りしもの、

うち面白しと思ふものゝうちこれより順次申上ぐべく候誰にても先づ目につくは

婦人の足

これは最早いや味のさす程話されたる事に候らへば小生は此の足に着けらるる靴の事につき少々申上ぐべく候一躰支那婦人は手細工は甚だ巧みにし大は衣服より小は巾着財布にいたる迄たいに之を縫ふのみならず之に文し之を飾り一見職工の手になりしかとも思ふばかりのもの平々凡々の通常婦人の手々になされ候其の靴をつくるも亦如此く其の木部の踵より其の美麗の縫繍したる表其の丈夫に綴りつけたる底にいたる迄悉くやさしき一人の指にかゝるものにて商店なき山奥にも少しも不自由を感ぜざる次第なかく深窓の函つめ婦人も並一通りにては無之候今これを作る荒増の順序左に圖に従つて申し候らはんに先づ一枚の薄ぺら板これが第一の基礎に候これを形として前に黒き布幾十枚を糊にてあはせたる厚布を裁ち之に別に綴りたる底をつけて疊糸にて丈夫に合はせ第二圖を作り候



第一図

第二図



第三図 上図ノウラ



第四図 踵

これと同時に第四圖の木製踵は赤布にて包まれ候この木切れは生等が舎營せし田家にて少し大く思ふ處には必ず籠に六七十粗くひき切りて貯へあり候ひき扨底も出來あがれば此度は表に候

「あのそこひらに薄つぺらな竹は御坐ひますまひかなー」などゝ妻はいふべし「エ何にするの」なぞと夫は答ゆべしこゝにて長サ一尺計り幅一二分計りなる竹の一片夫の手に周旋せられて妻はこれを曲げ卵形にくゝり紙を張りて水を霧吹きし「あの所夫、一寸そこに干し

てくださひませんか」
其の干きたる所のものに靴方に切りたる赤地の表糊にて再び此の上に張られて圖の如きもの出で來候而して



第五圖


第六圖

此の赤地の布には種々花鳥を墨にて下畫しあり候かくしてこれより五色の彩糸にて暇をつぶし精をつからし美麗なる縫をほどこすものにて其の圖様も一樣ならず或は曲線の配合あれば或は直線の組み合せなりしこれを縫ひはくし上けたるものはなかなかうるはしきものに候

其の圖様の一二第六圖にて御承知くだされ度く候

此の一片は即ち靴の表て半面にてこれを二つあだかも我が足袋の表を綴るが如くにつゞりて其の上端に縁をとりてこれと前作り上げたる底とを合はせて初めて一個の靴出來上るものにてなか〳〵容易からぬ辛勞に御座候

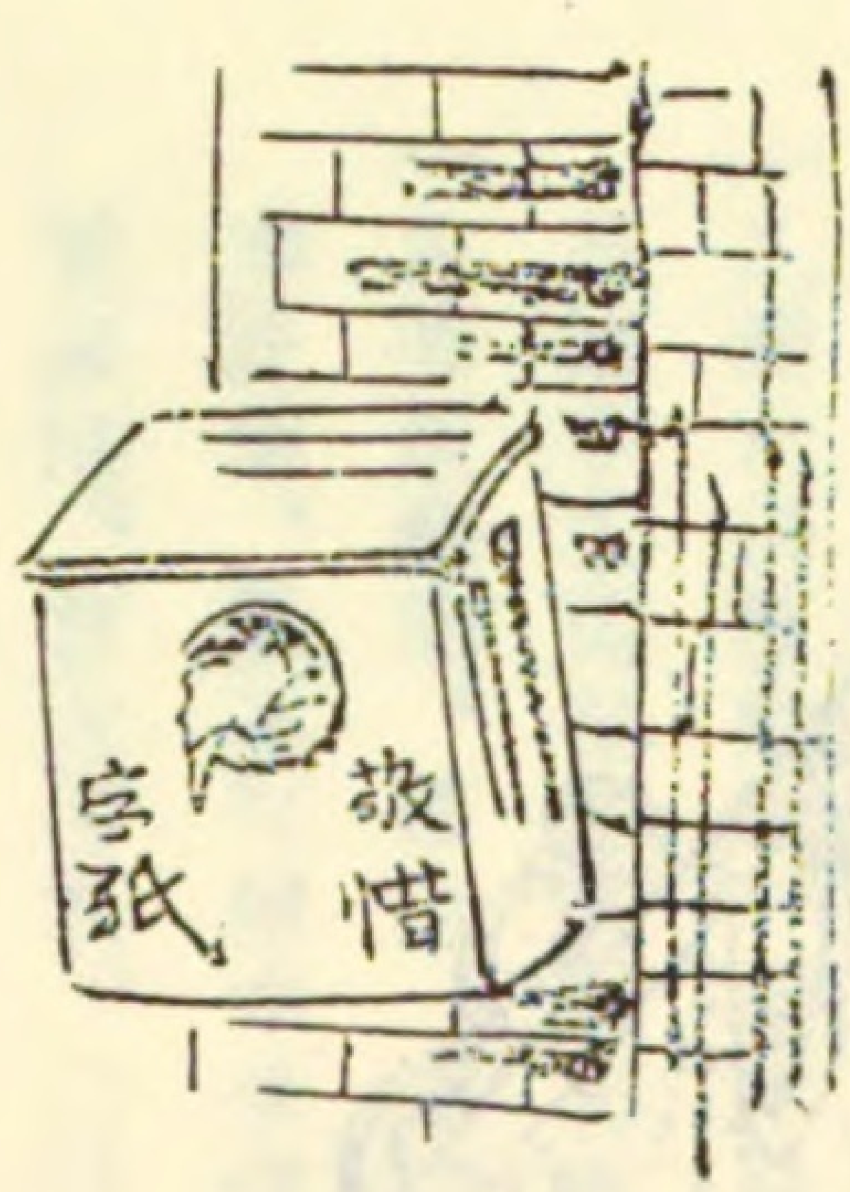
第七圖は其の出來あがりたる圖に候おかしきは其の木製の踵西洋婦人の靴の如く裏底にはつかずして上は底と下た底の間にはさまるゝ事に候猶おかしきは此の踵の眞の踵部にはあらずして足の眞ん中にあるとに候彼等は如何にもして少しにても小さく見せかけんと致し候より考へ出せし巧案にてたしかに其の希望の幾分はこれにて成就いたし候されば足の尖端は非常に小さく非常に細く候へ共其の後部に致つてはまん圓く太り居りて甚だ見惡き者


第七圖

に候これを掩ひ候らはんが爲め彼等は幅五寸以内のレースめきたる物を用ひ候圖の如く上部に卷きて之を隱せし積りに候隨分此の間の苦心經營定めて慘黯たるもの有之べきと存じ候らへ共何分荒くれたる一兵卒には最これぎりしか見えず充分我國の婦人方には滿足を與へ申すとの出來ざるは甚だ殘念の次第に候

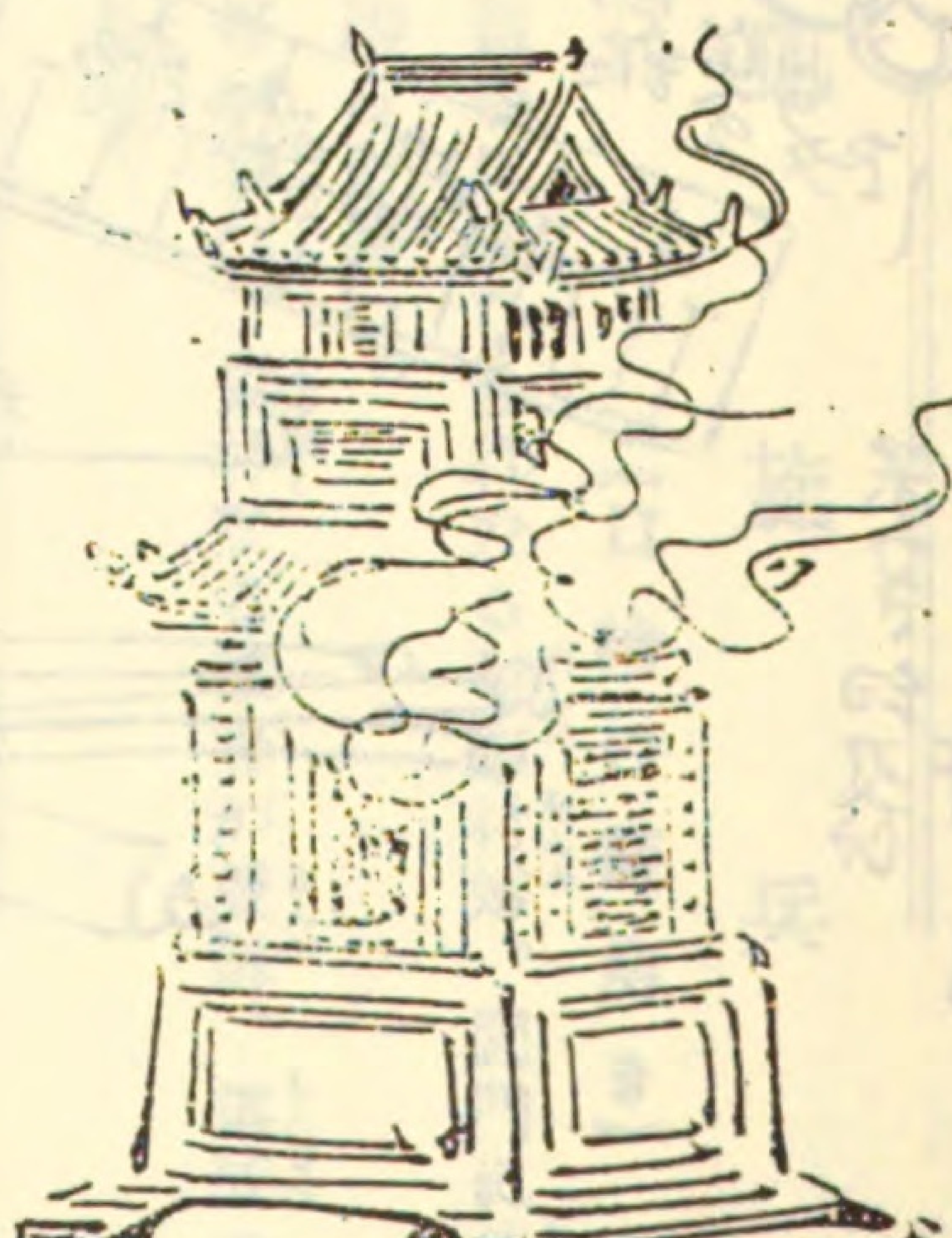
敬惜字紙塔

一丁町を歩行くことに二ッ三ッ必ず見出し得らるゝものは圖の如き函に候軒を支ゆる大柱の正だ中手の屆く高さに掛けられて丸き窓を上部に開らき文字を書したる反古紙を投げ入るゝ

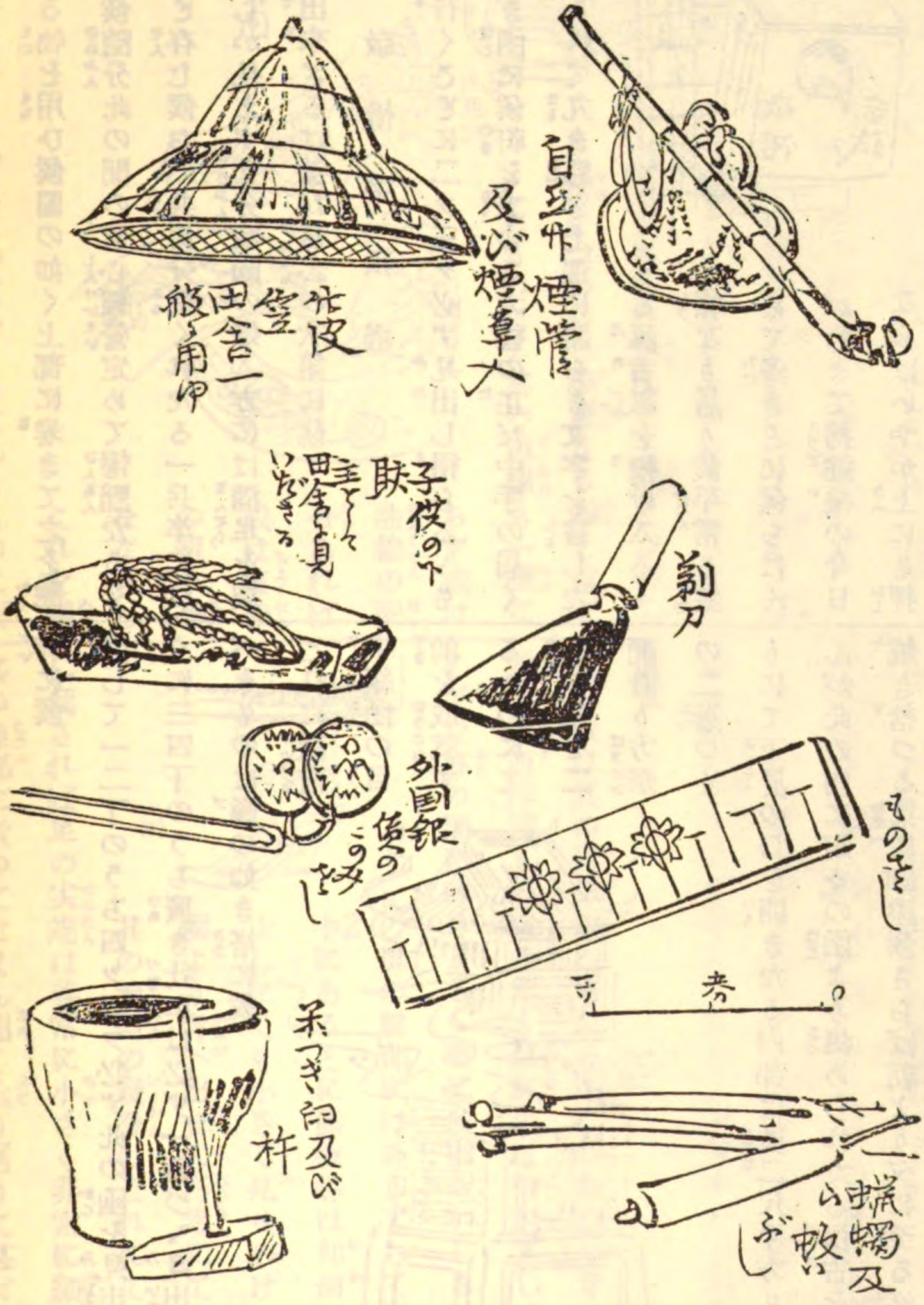


樣なり居り候平常も定めて多きとに候らはんがわきて掃途後の今日ならばいやが上にも押込まれたる反古紙はさながら慾婆が頰張りたるボタ餅の如く捩ち込まれつめ込まれて何れの函も今は滿腹の躰に候

而して一二丁のうち四ッ五ッ必ず此の函を見出すが如くに三四丁のうち廣き辻には必ず一個づゝ見出され得べきものは圖の如き塔に候



これは敬惜字紙函の目的を成就するものにて高さ凡そ二間計り方形の二階つくりにて下層の口を開きたる內部は廣二尺平方も候らはんが此の內に町々の函より集められたる反古を入れて燒き捨つる搆に御座候さらば朝より夕に至る迄塔は濛々たる白煙を放ちつゝ字紙を燒盡して片紙をあまさ


自在作煙管及び煙草入
菅笠 田舎一般ノ用ゆ
子供の下駄
剃刀
外国銀貨
ものさし
米つき臼及び杵

ず、これのみ古聖の遺敎を守り居るもおかしく、されば彼等は決して反古を不潔に用ひず我が新聞紙片等の散り居るなれば叮嚀に取り集めて之を火中いたし候此の事に關しては殊に戒めたる律則廿ばかり有之候今ま其の一二を左にしるし候らはんに

廣布敬惜字律廿則

一書籍。須要淨手翻閱。戒穢手揮汗。出恭小解。種々汚濁。凡有聖跡。均宜敬畏。

一勿於床上着書。以及書加蓐上。蓆上。床架上。凡紙張有字。俱不宜入婦人房中臥寢。

一字紙焚火。勿於穢地汚火。以致不潔。凡字紙灰。須要送去大江長流水。勿致踐踏。

一凡婦女以舊敢紙。剪作鞋樣。舊賬簿。夾藏針線。及繡字於荷包香袋扇袋枕頭。俱宜速改。切勿再犯。

一凡香店烟店、銀店、鐵店、藥店、糕餅店、染布店、本匠店、俱不可用字作標頭牌記。若不改易。恐商賈生理。有大不利。（以下畧）

以上諸欵。俱是敬字。字之不敬。或致疾病或致貧窮。功罪報應。極見分明。人多不知。惟願先生敎其學生。父兄敎其子弟。男人敎其婦女。識字之人。一説出俾不識字之人。曉然明白。隱而不言。其罪非小。賴諸口德先生。速説明。福澤日增

と成程これにては敬惜字紙函のかゝる聖字亭の立つも無理ならぬ事と存ぜられ候

凱旋兵

（口繪の畫解き）

村長村會議員等に率ひられたる村夫村婦、閭門に倚て凱旋兵士の歸るを待つ。質朴なる彼等が喜び、質朴なる彼等が贊辭、凱成の歡迎とは即ち是也。

時事一斑

日本人種の特性

金子堅太郎氏青山學院にて日本人種の特性を說き日本

人は新事物に對して始は摸倣し、次で之を消化應用し、終に一種固有性事物を產出せしむと云へり。而して彼は其政治宗教文學美術工藝に於て然りし例を擧げり。」新事物に對して始めは摸倣し、次で之を消化應用し、終に一種固有性物として產出せしむるは、常に進步すべきことを意味するものにあらずして何ぞ。常に進步するものは亦世界に劣敗することなき人種なることを意味するもの也。

痘瘡の寄生虫發見

緖方博士多年痘瘡患者につき研究し、此程遂に其病原の一と認むべき一種の寄生蟲を發見したり。其寄生虫は滑虫の腸內に寄生するグレブシドリアナといふものゝ屬なりと。

科學上の新發明續出するは賀すべき哉。

含珠燒の發明

其人は佐賀縣樋口治實氏にして、家世々陶磁器の製作を業とし曾て一小磁器の中櫻花樣の燒瑕燦然として透明の態を見て、こゝに新機軸を出さんと志し今を去ること十五年則ち明治十三年より工場裡に蟄居し經營慘憺、資力も盡なんとして明治十九年春漸く含珠燒を成功し、二十六年米國シカゴ閣龍世界大博覽會に同品を出品し、非常の名譽を博したり。其審查報告に曰く「日本佐賀樋口治實の出品に係る純白透明なる小形の陶器に花鳥の摸樣を寫眞せし透明の態、意匠頗る美且妙なり」。尋で同國桑港ゴルデン、パークに開設の冬期萬國博覽會よりも賞狀並びに金牌を授りたりと。

日本石炭

石炭の消費高は物質文明の發達程度を表す。

去る廿六年我國石炭の採堀したる數量は、實に五十五億七千二百八十七萬五千八百九十六斤にして、其內消費せし高は、二十九億四千七百四十五萬二千七百三十九斤。其船舶に使用せしは七億三千五百八十六萬六千百二十六斤。鐵道用一億千七百七十三萬〇七百九十三斤。工場用十二億二千四百六十四萬四千六百四十七斤とコークス二百十四九萬四千四百斤。製鹽用七億六千九百二十一萬一千百七十三斤。其の他は外國に販賣したるものにて、其平均百斤價は十一錢四厘に當れり。

蠶絲業繁昌

繭の上作、生絲の高價、蠶絲業の繁昌を見んとす。

